

第七章



子守をしながら遊ぶ子供。昭和35年（1960）2月14日（撮影：金城棟永）

回想録

回想録



有銘校の思い出

知名 定 善

第三代校長・昭和四五年～四八年勤務

私が有銘小中学校に、校長として赴任したのは昭和四五年（一九七〇年）八月一日付であった。

有銘校は山や丘に囲まれ、小川のせせらぎを側にし、海を前にした自然の大変美しい学校であった。私は国頭教育事務所指導主事からの校長へ、ということもあって大変張り切って就任したのである。

子供たちも大変明るく、すなおで父母の学校への協力もまたすばらしく、毎日が大変楽しい学校であった。私は校長住宅に単身赴任であったので、隣り近所の方々が私の住宅を訪ねて来てくれたり、また夕食に、さそってくれたりして、時々はお酒を飲み交わす等、楽しい毎日がつづいたのである。

職員や父母の協力を得て、運動場の整備や花園づくりもやった。その甲斐あって沖繩タイムス社より、緑と花いっぱい運動の優良校として表彰を受けたのも楽しい思い出の一つである。

それから音楽の指定校を受けて研究発表会ももった。美しい山や岡に囲まれ、清らかな小川の流れ、小鳥たちのさえずりに調和する気持ちよい楽器の音や、児童たちの明るい唄声が相調和して、ほんとうに毎日が気持ちよい日々であった。

管理職になって、はじめての学校であったので、少しでしゃばりの面もあったように思われた。職員がどんな授業をしているか、子供たちがどう勉強しているかを知ろうと思いい教室回りをしたのである。そしたら或る日、三年生の男の子が校長室に入って来て「校長先生はいいな」。授業はしないで教室を回って遊んでいる」と言うのである。それを聞いた時、これはいけないと思って教室回りを止めた楽しい思い出も残っている。

時たま、慶佐次の海に出かけて、つりを楽しんだ。そしてつってきた魚で魚汁をつくり、校長住宅で、職員や父兄と夕食を共にしながら酒を飲み交わし、名護へ発展した思い出も忘れられない。私は年令的に若くパリパリの時代であったので「よく働きよく遊べ」の言葉を取り入れた楽しい三カ年であった。

私生活は、平日は校長住宅でおくり、土曜日は自宅に帰り、家族と「離れがなき」の気持ちが出て仲のよい一日になっていた。そして月曜日はバスで出勤と言う誠に変化に富んだ日々であった。久志、辺野古、二見、三原、天仁屋等の部落を通り、右に青い海を左側には美しい山脈を眺めながらの気持ちよい出勤であった。

このように、いろいろな楽しい思い出を胸の中に、昭和四八年（一九四八年）三月三十一日で「有銘校区を讀える」の歌を残して



学校職員・昭和46年。(写真提供：知名定善氏)

有銘校と別れを告げた。

美わしの有銘校

1. 裏の小山に つつじ咲き 鳥の声

花園の花は 咲きこぼれ コーラスバンド 相和して

小池のコイも すいとすいと 今日も流れる 楽の音が

ああ美わしの 有銘校 静かな里に 学舎に

3. 明るいあいさつ にこにこと

かわす言葉に 心晴れ

今日も一日 学ぶ幸

ああ喜びの 有銘校

思い出の有銘里

1. 山脈ぞいを バスにゆれ 2. 慶佐次の海に 糸をたれ

通りつづけた 有銘里 ツリを楽しむ 一時に

青葉若葉は 目にしみる 心のうさも 波に消ゆ

父母の情は 身にしみる 思い出の浜 なつかしや

3. 有銘の山に 日が落ちて

静まりかえる わが住宅

友と飲み交う さかずきに

住めば都と えびす顔



有銘校に勤務して

金城 昂

第二五代、二七代校長（昭和五四～五六年）

五九年～六二年勤務

栄えある百周年おめでとうございます。明治二八年「天銘尋常小学校」として発足して爾来百年、幾多の有為な人材を世に送り出して来た本校の発展に心からお祝いを申し上げます。

私は昭和五四年の四月から五六年三月までの二ヶ年と、昭和五九年四月から六一年三月までの二ヶ年、通算四ヶ年間本校に勤務いたしました。

私は十七年前、赴任した最初の日に、言い知れぬ驚きと、感動が私の胸を突き抜けていったことを昨日の事のように憶えています。それは、普通一般にへき地や小規模校の子ども達は、素直で人なつっこく、思いやりがあり、協調整に富むという長所を持つ反面、短所として集団の中では引込み思案で、自己発現力に乏しく、考え方や、言動が他律的で、お互い相互間の磨き合いに弱いということが指摘されますが、本校の子ども達には全くその影は見られず、子ども達ひとりひとりが活力に満ち、人怖じもせず人前で堂々と大きな声で自分の思っていることや意見をのべ合い、全体の雰囲気がいきいきとしてまさに「活きている子ども」そのものを体現している様相に眼を見張ったものです。それこそ「眼

から鱗の落ちる」思いをいたしました。そのことについて先生方に話し、話を聞いた所、以前は本校の子ども達も例にもれずその短所を持ち合わせていましたが、前任の方々がその克服に努力され、特にこの二年来、県教委の研究指定を受け全教職員と地域が一体となってその課題と取り組んで来た成果だということを知られ、今後とも気をゆるめずに継続していかねば元に戻ってしまう課題だということを教えられました。幸い私の在任中も、やる気満々の先生方に恵まれ新たに「自主性を育てる特別活動」をテーマに県教委の指定を受け、学校と、PTAが一体となって推進し、その持続を図ることが出来たとおもっております。

本校の子ども達が身につけたこのような特性は、私の在任中いろいろな面でその力を発揮しました。校内における授業、行事等は勿論、村や地域の子どもにも関係する各種行事にも積極的に参加し、司会やその運用にリーダーシップを発揮し賞賛を得ました。又各種団体の主催する文化行事や、スポーツ大会等にも積極的に応募、参加し、個人的に或は学校として多くの大賞を得ております。紙面の都合で個人の例記が出来ないのは残念ですが、個人外では主として次の事が印象に残っています。○第二四回学校教育賞受賞（五四、十一月）○第二六回九州地区へき地研究会の会場校として研究発表（五五、十一月）○沖縄教育版画コンクール学校賞受賞（六十、三月）○第二九回日本学生科学賞沖縄地区優秀賞と、第八回沖縄県少年科学作品展県知事賞（六十、十一月）○なかならずく九へき研の研究大会には、九州、山口の八県から先生方が本校に集い研究発表を行なったのですが、子ども達が行な

った授業の司会、進行や、先生方へのはきはきした応対ぶり、その言動は、たいへんなお賞めにあずかりました。わざわざ校長室を訪れ、子ども達への賞賛の言葉を送って下さった他県の先生方もおられました。スポーツの面では中学校全員参加のサッカー部は毎年北部地区ではベスト4以上に残り夏休み前には県大会出場を経費を調達するのに嬉しい悲鳴を上げたものでした。又お家芸の棒高跳も県大会や九州大会にも出場し、県の記録更新も再三に亘って行なわれたのも御承知のとおりです。その頃の子どもの達の活躍振りを思い出す時、今もって胸の熱くなる思いがします。

赴任当初の昭和五四年頃の校地校舎の状況は体育館と中学校教室を併せた管理棟が新しく出来ているだけでしたが、村当局や村教育委員会の整備計画の推進によって六一年までには現在の校舎が建て替えられ校地が整えられました。その間校地整備のためにPTAの方々には多大な奉仕をお願いし協力していただきました。

近年私達の村の過疎化に伴い本校の在籍が減少し、その将来を危ぶむ声も聞かれますが、たとえ児童生徒が一人でも残っている限り学校の教育機能が失われるものではないと思います。在籍の多い大きな学校が必ずしも良い学校とは限りません。学校で学ぶ子ども達が良き師、良き友と出会い、心豊かに、たくましく育ち、学窓を後にした後も、自らの人生のゆくえを照らす心の中に灯した一灯として、いつまでも消えることのない学校、それがほんとの良い学校ではありませんか。これから先、このような学校へ発展していくことを心から祈念し、併せて私の在任中にお世話にな

った先生方や、PTA、地域の方々には心からの感謝とお礼をこの欄を借りて申し上げます。



慶佐次ウッパマにて水泳教室 昭和60年(1985)7月 (写真提供:金城 昂)



有銘校に懐かしさをこめて

与那嶺 傳 旭

第一九代校長（平成元年～三年勤務）

平成八年七月二日快晴に恵まれ、有銘校創立百周年を迎えて、村内外から多数のご来賓、同窓生、PTA会員、村区民の皆様をお迎えして、かくも盛大に記念式典並びに祝賀会が行なわれたその時の感動が今、尚思い起されてきます。改めておめでとうございます。

有銘校をひもといてみますと。

明治二十八年（日清戦争が勝利した年）四月に区事務所の一室を借用して、児童数二十人、先生お一人、安谷屋音房先生をお迎えして、天銘尋常小学校開校し、三年後明治三十年に現在の敷地に移転、学級も二学級になり初代校長玉城定英先生を迎えました。百年の間には久志村から分村や学制改革による校名変更、去る沖繩戦では校舎焼失し、幾多の困難に遭遇したのですが校区の方々、同窓生の燃えるような教育愛と努力により今日の充実した学校を造り上げたものと思います。有銘校出身者の中には政界をはじめ財界、教育界、医学界、その他あらゆる分野で活躍されており、有銘校で学び育った「有銘根性」がひしひしと感じられました。

私は平成元年から三年間校長として勤めさせて戴きました。県

道十四号線（源河線）が開通され交通が便利になり名護から通勤した峠には、花パークも作られ、四季折々の野山の変化を味わい、朝は慶佐次方向から昇る朝日を拝みながら、夕方は伊江島の裏に沈む真つ赤な太陽を見ながら毎日がドライブ気分です。楽しく過ごすことができました。

視点を變えて（同窓生の母校愛の一例）

運動会の反省会場の席でいろいろ話しているうちに、ブラスバンドの事が話題になった。音楽の先生から「本校の中学一年生は打楽器、二・三年生は吹奏楽器で演奏する。全員打楽器と吹奏楽器を経験して卒業するので、楽器が不足で他校から借用して間に合わせています」との報告がなされた。その報告を聞いた比嘉辰雄氏は「学用品が不足では困るのではないか、もし教育委員会が購入して貰えなければ私達の区民で買ってあげようではないか」との力強い発言をなされたので、早速村当局、教育委員会に交渉しましたら、「教育に僻地があつては困る」と言うことで、よく理解された臨時議会で承認され多額な楽器備品を購入することができました。

それに今度は、学校バスの買い替えの時期に來たのでPTA会長に話を持ち出したら中古車を寄付金で購入しようか、と話はついた。しかしPTA会長又吉晃氏は、同級生である大湿帯出身の諸見里安男氏に、交通不便な有銘校は学校バスが必要であるのだと話した。

すると諸見里氏は「学習活動、部活動に支障があつては困るではないか」と百万円という大金を寄付してくださいました。教育委

員会にも協力を得て、校区民からの寄付金も予想以上に集まりましたので二百三十万余りで新車を購入し、鉄筋コンクリートの車庫も建築することができました。

諸見里氏は現在、ジーンズショップの社長である。諸見里氏の中学時代は、道路も整備されてない大湿帯からの山道を徒歩で有銘校へ通学したことを話された。交通の不便さを痛切に体験し、母校を愛し後輩をいとおしく思ったからであろう。教育活動や

スポーツの面では、知能と学力との相関関係を分析し、個々の学力について徹底的に調べ二期からの授業のやり方、個に応じた



秋季運動会も楽しい思い出。(撮影：山城定雄)

個別指導を工夫するようになり、成績も向上し県の学力検査の結果も上位になった。学力向上だけでなく体力づくりも積極的に行った。県内で「中学校の棒高跳び」と言えば有銘校」と言われるほど優勝記録が長い。指導者仲嶺真伸氏の献身的な指導の賜物である。



鯉の放流。

学校一・二年生を相手によく健闘されました。

学校の前を流れる有銘川に満ち潮になるとボラが回遊してくるが川にはへどろが堆積し生活排水、空き缶、ペットボトル、ビニール袋が散在し、川が汚れ息苦しそうに泳いでいるボラを見て、何とか川を蘇生しなければいけないと考えている時、県環境保健部自然保護課から環境教育モデル校指定を受け「水性生物等水質調査」を行い水質の汚れによって生物環境に変化のあることを理解させる為に有銘川を浄化し昔のように有銘川に清らかな水が流れ、メダカやフナ、エビなどが住める環境を作る為に水性生物の調査だけに終わらず積極的に河川に関心をもたせるために平成三年五月十七日児童生徒、PTA、地域住民が共同でニシキゴイを川に放流しました。川に対する関心が高くなりへどろも取り除かれ水も奇麗になり今では鯉も大きくなり泳ぎ回っている姿は優雅である。

有銘校が百周年を節目にして名実ともに充実し、さらに将来に向かって限らない発展を遂げ輝かしい伝統と校風が明日への世代に引き継がれると共に同窓生各位の益々の御発展を祈念してやみません。



有銘校の思い出

又 吉 慶 典

元教諭（昭和二十年～二十九年勤務）

同窓生（昭和三年生まれ）

戦前の県立二中を終戦の年に卒業した私は当時一八才、大先輩の新里良雄先生にすすめられ有銘校での助教のスタートであった。本字の石垣にテントを掛けただけの日よけ教室で五年生を担当、チョークもなく俗に「かつお石」と呼んでいた粘土質の石を使い、教科書もなく、カリキュラムもない、ただ自分の知識を子どもたちに伝えるだけであった。

終戦直後生活も苦しい中でどうやら教室は野戦用のテントが配られた。後に父母や地域の皆さんの力でかや葺き教室を造ってもらった。高校入試が始まる頃から、やっと教科書らしいのができ、それを中心に全員合格をめざして必死になったものである。正規の六時間の授業を終わって、課外授業が始まる。夕方になると有銘の子共達は夕食のため各家庭へ、慶佐次の子共達は、持ちよった食材を使って学校での自炊生活である。夕食後はすぐ夜間学習にはいる。石油ランプの下で約四時間みっちり学習する。土、日もない、かや葺教室の天井裏を寝室にして受験生全員の合宿である。もちろん男女は別棟で男女とも先生が一人ついていて、かや葺の天井裏で石油ランプを使つての「ぎこね」、よくも火災をお

こさなかつたもんだと感心したものである。翌朝は石油ランプのすすで全員鼻の穴は真黒である。朝食は有銘の子はそれぞれ自宅で、慶佐次の子は後輩達が昼食もいっしょにあずかって、とどけてくれる。

家庭訪問は先生方の接待のため家族が色々気を使うことを耳にしていたので「お茶と灰皿だけにしてくれ」と言つてあつた。ところが、いざ家庭訪問が始まつて見ると、いく先々どの家庭でもソートミンチャンプルーである。一日五、六軒、一週間ソートミンチャンプルーじめにあつた。一人の子に好きな食物はと聞かれた覚えがあり、しまったと思つたが後の祭りである。「口はわざわざいのもと」大失敗であつた。

夜間授業担当の日に急用で子供達に自習をいいつけたことがある。用件をすませ戻つてみると子供達はみんな、ほろ酔いかげんである。校長室の「酒がめ」をからっぽにしてしまつていた。そのことは内緒にして、後日宮城盛吉校長には先生方が飲んだと弁解したのも思い出のひとつである。

当時のA Jカンパニーからおくられた三KWの発電機を利用して校内だけでなく、本字の各家庭へも電力を供給することができた。（作業は子供全員で）。電力のお陰で巡回映画も招致できたし、山羊を全員で飼つたり、学年費の捻出にも色々工夫をこらしてきた。

若さと情熱だけでは子供達の教育はできないと覚悟をきめ文教学校と外国語校（両校とも一九五〇年に発展的に琉球大学に吸収）へ進学した。現職のまま給料をもらいながら学ぶことができた。



当時の教職員。昭和26年頃

現職のままだから当然卒業後は有銘校で勤務することが義務づけられていた。まだ有銘校が六〇周年をむかえない以前のことである。

七ヶ年有銘校にお世話になった。家庭の都合で那覇市内の学校へ転任することになったが、転任先の町の子共達に有銘校の思い出話をよくきかせている。

色々なことがついききのうのように思われる。

在任中のエピソードの一端を紹介して、原稿を依頼された責任を逃れることにする。

最期に母校の今後の更なる発展を心から祈念し、創立一〇〇周年のお祝いを申し上げます。



ガジュマルの下で当時の教職員 昭和27年（1952）（写真提供：島袋徳盛）



思い出

八幡美和

元教諭（昭和二年～三二年勤務）

同窓生（明治四三年生まれ）

創立百周年を記念して記念誌発刊によせて、心から敬意を表します。幾多の人材を世に送り出した有銘校出身の一人として誇りに存じて居ります。過去の学校生活を思い出しながら記録させていただきます。戦前の諸先生方の面影が忍ばれて頭をよぎりませす。

これから記憶をたどりながら記してみたいと思います。学校正門通りには人家があり、お店も二、三軒ありました。その裏の方の上流から流れる清らかな川が流れていて、そこでお友達とよく泳いだり、川えびをとったりしました。その側に田園があり、農家の方々の黄金色の稲の刈り入れ等も頑張っておられたお姿がたのしく思われました。無言のかかしさんが朝から晩まで農作物を守る役目をしていたと思います。都会では見られない光景だったかも知れません。校庭には大人五人程で取り巻く位の梯梧がありました。花咲く頃は真紅の花が咲き、散る頃は赤い絨緞を敷きつめたようで見事なものでした。お陰で夏知らずでした。

私は新入学受付に親戚のお兄さんこと新里秀兄さんについて行きました。受付の先生は祝嶺校長先生でした。生年月日と氏名を

聞かれるようでした。名は比嘉ウサと云われましたので、「私は比嘉ウサ違う。比嘉ウシ子だ。」と云ってウツカピラまで泣いて逃げた思い出があります。後を追いかけたお兄さんがそのように訂正するから、と私をなだめて学校に戻りました。お二人の方は目で合図をしているようでしたが、それまでは理解しませんでした。あれから、名でうし子、うし子と呼ばれて満足していたと思います。（笑い）。小学三年の担任の仲嶺真寿先生が出席を取られ比嘉ウサと呼ばれましたので自分とはまどってしまいました。本当の名前はそうですよと云われましたので、素直に「ハイ」と答えました。学校では第二の比嘉ウサでした。

私は慶佐次より通学して居りました。慶佐次の某家の娘と御存知の事と存じますので省略させていただきます。大正一二年、久志村現名護市より分村して現在の有銘に校名は変わりました。昔は天銘小学校でした。当時は皆素足で通学して居りました。平常の服装は着物と腰ひもを前に結び、遠足の時等には当時の一銭二錢を細帯にむすんで当地でのあめ玉代にしました。頭の髪はカンプ小で、母に結って貰いましたが少しでもゆがんでいたら、「ゆがんでいる」と髪を引張って泣いて、母を困らせたこともありました。その時だけは白米の弁当だったと思います。

四大節には髪はおさげにしてリボンを結んで変身し、喜んで居りました。四大節とは、新年、紀元節、天長節、明治節のことで現在は新年、建国記念日、みどりの日、文化の日のことです。皇民化時代で天皇陛下のメッセージとして校長先生から拝聴し、それは厳肅で大変緊張しました。当時のことは今の子供達に

は想像もつきませんでしょうね。それも時代の流れで平和の時代になりました。

私は旧制女学校入学のため課外勉強して帰る途中に、大谷橋の坂でいのししが現れて気も失いそうでしたが、勇気をもって石を投げたら谷底に逃げていったので命拾いしました。

戦後の校舎の復興に御先輩の方々の御尽力で山から木材を切り出して風雨をしのげる立派な茅葺の校舎を作って、子供達の勉強に支障がないように努力して下さいました。ないないづくしの時代、すべてのものが手作り授業で当時の先生方の御苦勞も並々ならぬものでした。私もその一員として加わっておりました。物資不足の折、色々思案なされて児童の指導に当たって下さった諸先生方の面影が走馬灯の如く頭をよぎります。当時の同級生や純真な子供達と飛び回って遊べた当時の若さがしのばれてなりません。もうすっかり白髪のおばあさんに変身しました。

あらましを記録しました。御支援の皆様方の御健勝を心からお祈りいたしました。更なる母校の発展をお祈り致します。



昭和40年（1965）頃の慶佐次（写真提供：翁長 ナハ）



回想

大城 博

元教諭（昭和二六年～三八年勤務）

同窓生（昭和七年生まれ）

「恵み豊けき天然の楽園に建つ有銘校」有銘校校歌の一節で戦前の有銘校は学校の前の川の水は清く水量も豊富で夏になると学校帰りの子供達が涼を求めてそこで一浴びすることも多かった。校舎の後の森は大木が茂り木の葉一枚も取ることができない程厳粛な御願所となっていた。運動場には私たち子ども五、六人でやつとかかえることのできる大きなでいこの木四本があり有銘校のシンボルにもなっていたようにも思われる。このでいこは初夏の頃になると真紅の花が満開し、その花が散る頃になると朝の登校時に校門から眺めると運動場一面に真っ赤なジュータンを敷いた様に鮮やかで見事なものであった。また、真夏の暑い陽には緑の葉が生い茂りその下で元氣一杯運動や遊びに熱中したことが思い出される。

このような自然が豊かで恵まれた環境で学ぶことができたことを誇りに思う。しかし、去った沖繩戦の空襲で校舎が全焼しそのあたりで四本のでいこもすべてが枯れて教育環境も大きく変わってきた。

私は一九四七年有銘校を卒業し、一九五一年から約一二年間母

校に勤めることができその間の特に印象的な行事を通して思い出とする。

一、辺土名地区陸上競技大会において初優勝

国頭、大宜味、東の三村を辺土名地区として辺土名地区教職員会が主催する陸上競技大会が地区内一五校の小学校と一四校の中学校のすべてが参加し毎年盛大に行われていた。当時はスポーツ関係の対外的行事としては、小学校で唯一この陸上競技大会のみであった。地区内の各学校ではそれに向けて精力的な取り組みがなされていた。有銘校においても校内陸上競技大会を開催し日頃のスポーツ活動を通してスポーツに対する関心を高め選手の養成を図った。地区大会の一月半位前になると校内大会で選ばれた選手候補の強化練習が行われた。指導は健康・安全を中心として子どもたちをあたたく見守り励ますことをねらいに大城親喜教頭をはじめ全職員がトラック、フィールド、投擲に分かれて行なった。（技術面の指導は体育主任とスポーツに詳しい職員が当たる。）子ども達も全員運動が好きで先生の指導にも素直に耳を傾け日暮れまで熱心に精一杯練習を続けた。

競技大会当日は会場の国頭中学校に入ると子ども達は少々緊張したように見えたが競技が始まると緊張が少しずつ和らぎ日頃の力を充分に出し切り始どの種目で予選を通過した。午前中で早くも男子の走り高とび、女子の走り幅とび等が一位となり有銘校優勝の声が聞かれるようになった。午後になると決勝種目が行われ次々と得点を重ね結果的には五二点をとり二位の三四点に大差をつけて見事初優勝の成績を収めた。当時の六年生だったの一五名

の在籍で優勝することは地区の関係者はじめ誰一人として予想もしなかっただけに学校の職員、選手にとつて大きな感動と共に「やればできるんだ」と言う自信と勇気を与えた。

学校では優勝の知らせを聞いた職員をはじめそれを知った多くの父母や地域の皆さんが選手の帰りを待って祝勝会が盛大に行われた。翌日は有銘、慶佐次全校区をあげて部落から部落への優勝旗を先頭に優勝パレードを行ない地域の皆様から大きな激励を受けた。当時の六年生は次の一五人であった。

・ 崎山喜邦・宮城正則・寄川克己・田仲康宏・親川長栄・比嘉等・当真実・稲福よし子・伊佐末子・大城ゆき子・天久静子・宮城初子・屋富祖弓子・崎山よし子・新崎桂子

二、第九次教研中央集会で公開授業

有銘小学校は、昭和三四年度に琉球政府文教局指定の体育実験学校として徒手体操の研究実践を積み全琉的にその成果を発表した。その成果として子ども達が健康、体力づくりに興味・関心を示し体育スポーツを好むようになった。実験学校当時三年生であった子ども達が昭和三七年には六年生となり校内をはじめ辺土名地区体育同好会、東村教職員会総会、辺土名地区教研集会和多くの公開授業を行う機会があった。子ども達は体育についての興味・関心が高まると共に公開授業に対しても誇りと自信をもつようになった。体育学習についてのめあてのもち方がわかり学習課題を明確にして学習の仕方を工夫し、助け合つて自主的に学習を進めることができるようになった。それと同時に運動技能の向上も著しいものがあつた。

このように子ども達にとつて多くの先生方の前で行う公開授業という明確な目標があることは、体育学習をはじめ他の教科の学習も意欲的になり学校生活全般にわたつて生き生きとした態度が見られるようになった。中央での公開授業が決まると子ども達の提案で冬休みも学校に出て器械運動の練習をすることになり技能はますます向上した。

辺土名地区教研集会において公開授業を行った子ども達の実態を見た指導班の先生方をはじめ参加者の先生方からも是非中央教研集会で公開してその様子を全琉の先生方をはじめこれから教師を志す琉球大学の学生にも見て頂きたいとの要望、推薦があり、中央集会で公開授業を行うことになった。当時の中央教研の会場は毎年那覇地区で公開授業も那覇地区と決められていて他地区からの授業参加は計画されていなかったのであるが関係の先生方の努力と配慮で他地区から初めて参加が認められ公開授業を行うようになった。

参加は決まったものの派遣費は全額参加者負担となり学校としては困つてしまつたのだが今度の機会を逃がすと二度と中央で有銘校の子ども達の意気を示す機会はないというので宮城功雄校長の決断により修学旅行とセットして派遣することになった。経費の一部を子ども達の父母に負担してもらい残りは校長が先頭に立つて全職員が夜おそくまで校区内の各戸を回り募金活動を行った。全父兄がその快挙を大変喜び賛同して下さり予想以上の金が集まり安心して二泊三日の修学旅行を兼ねた公開授業を行うことができた。更にこの催しを伝え聞いた那覇在住の先輩各位からも多額

のご芳志を頂き子ども達をはじめ全職員が感激でいっぱいでした。

四三名の子ども達の中には初めて見る那覇の町に感激し、特に会場の琉球大学の体育館（運動場のような家―子どもの表現―）にはその規模の大きさにびっくりすると同時にこのような所で全琉の先生方を前に公開授業で器械運動の技を（とび箱、マット運動）発表することのできる喜びは大きいものがあつた。当時の様子を全琉各地から集まった先生方のまとめの一部を紹介し回想とする。

沖縄教育―第九次教研集会研究のまとめ（保健体育） 沖縄教職員会編より

琉大体育館に各地区から馳せ参じた会員が一階二階で今か今かと待っている。さて、ベルが鳴ると、児童より全員がソワソワしだした。いざ、活動がはじまると「実に柔らかな体をしているね。」とか「すばらしい」とかの声があちらこちらから耳に入る。

参観者は教師と児童の言動を聞きもらすまい、見逃すまいと真剣そのものだ。背伸びする者、左右に頭や体を動かす者、メモをする者さまざまだ。そこでマット運動の「とび込み前転」である。男子が補助台になり、その上を女子がとび込みをするわけだ。補助が悪ければ手を取って教え合い、注意し合い、女の子が失敗して男子の上のつかっても平気だ。また次の「背支持前転」ももちろんで男の子と女の子の協力が目立つ。一方、とび箱に目をやるとそこでも男女の差別なく行われている。手を取って教え合い助け合う姿は実にうらやましく、参観者もつい引きづられて邪魔に



辺土名地区陸上競技大会で初優勝し区内をパレード。学校アルバムより

なるくらいだ。そればかりではない、技能の素晴らしさ「開脚とび越し」の例をとってみよう。
跳び箱から踏み切り板の距離を色々かえ「○○さん、でき



音楽の授業の様子昭和33年頃（学校アルバム）



昭和37年当時の教職員（写真提供：平良農勇）

る？」などと聞いてみたりして、自主的に行っている。跳び箱の前方へ一米ぐらいもとんでいく技は、中学二年生ぐらいであろう。一人残らずできる。六年生とは思われない。いや中学校の体操クラブを思わせるような技能である。グループ全員が個々の能力をよく理解しているのだ。あまりのすばらしさに時間を忘れ、気づいた時には、いつの間にか終わりに近づく、これから本時の反省である。男女交互によりそつて座し一人一人の反省結果が記録される。参観者はグループ活動を通して技能を高めていく態度や助け合い学習のあるべき姿を見たようで明るい気持ちをもつと同時に参考になった。



山原再発見

石川 元平

元教諭（昭和三年～三三年）

（第六期生）

七月八日（月）朝刊のスポーツ欄を見て、思わず「スタイヒヤ」と叫んでしまいました。県中学校通信陸上大会で「棒高跳一位・平田一真・記録三三・六〇M（有銘中）」を見つけたからです。これまでも、何人もの沖繩一の名選手を生んだ母校に又一人ニューヒーローが誕生しました。全中学校生男女合わせて僅か二〇人程度、男子だけだと一〇人そこらのミニ校からの「沖繩一」は特別の意味をも与えます。

私は、昨年開催された母校での「PTA文化講演会」の折にもふれましたが、沖繩一をもたらしたのは、本人の素直と努力もさることながら、組織化された良きリーダーに恵まれたことと、村や学校当局、家庭、地域のご理解とご支援の賜ものだと思ひ改めて心から敬意を表わす次第です。

子どもたちには、一真君同様すばらしい豊かな個性と秘められた素質があると信じています。したがって各々の個がもっている潜在的な多方面にわたる素質を大人社会の支援によって花開かせていただくよう願うものです。

いま日本の教育は、明治以来の世紀的な変革を迎えています。

戦後の日本の教育は、政治・経済に追従して「欧米に追いつき、追い越せ」の掛け声と共に、知識注入、点数主義と偏差値重視の教育を行ってきました。そのために、子どもたちは受験競争に追い込まれ、「三問」（仲間・時間・空間）が奪われるという異常な現象が出現しました。現在、深刻な社会問題化している子どもたちの「いじめ」「自殺」「登校拒否」なども、教育を含む日本社会の歪みの中から生まれたものです。戦後五〇年が過ぎた現在、ようやく教育を歪めてきたと言われる学歴偏重社会が問い直され、入試、入社試験にも改革のメスが入れられようとしています。父母・国民の求める教育の改革は二〇〇一年にも実地される「完全学校週五日制」によって、着実に根を下ろしてほしいと願うものです。

このような変革の中で思うことは、山原の豊かな自然環境の中で育った私たち同様に、いま改めて二一世紀を担う子どもたちの教育の在り方として、自然体験をふまえた生きる力としての教育の方向が示されることです。私はこれまで、亜熱帯の豊かな山原の自然を子どもたちの自然体験と環境教育の場にしては？と提言してきました。現在、日本本土から七百校余、一三万人を超える修学旅行も、南部戦跡や基地めぐりだけでなく、山原もその対象にしていけると信じているからです。私が「森と水の博物館」の建設について、「村政七〇周年シンポジウム」で提言したのは、そのような発想によるものです。あれから何年か経過しましたが、米軍北部訓練場の返還の動きや、国頭村への「野生生物保護センター」の建設などは、国内はもちろん国際的にも注目を集めるほ



創立70周年当時の校舎 (70周年記念誌より)

どの意義をもつものです。
 山原は、けっして辺境なんかではなく、命あるものの宝庫、生きた人間教育のど真ん中だという誇りさえもってほしいと思います。したがって、「東洋のガラパゴス」と言われる沖縄・山原の自然を再確認、再発見し、心の財産にしてほしいと思います。私は、子どもたちに人間と自然、生き物との共生の思想が育まれることを期待し、また子どもたちが物事の善し悪し、分別の分かる人間に育ってくれることを願っています。

最後に、教育と子どもたちの未来に幸あれと祈りつつ、こんご我が母校・有銘校が地域のコミュニティセンターとして大なる役割りを発揮されるよう祈念してやみません。



有銘小学校卒業記念・昭和33年 (写真提供：翁長ナハ)



母校に熱い想いを込めて

真栄城 徳 仁

元教諭（昭和三七―四一年勤務）

同窓生（昭和七年生まれ）

私は故郷を離れてかれこれ三〇年にもなる。現在宜野湾市に居を構えているけれども片時も古里を忘れたことはない。幼少年の頃を過ごした故郷、東村有銘、緑の山河、山原船も出入した紺碧の有銘湾、えびや沢蟹、うなぎなどを採ったり水遊びを楽しんだ有銘川、これらの自然に恵まれた古里は自分のアイデンティティを形造った心の原風景として深く胸に焼き付いている。人生のおおいなる希望とエネルギー、限りなく広がる夢とエモーション、これらの活力の原点は総て古里にあると云っても過言ではない。私は時たま戸籍謄本が必要な場合があり知人に頼んで東村の役場から取り寄せることがある。急用の場合は確かに面倒でもある。いつそのこと宜野湾市に本籍を移したらと云う友人もいるが、そのままにしてある。故郷との心理的一体感や心の絆まで断ち切れないからである。

さて自分が生まれ育った古里の思い出は、山程あって尽きないけれどもその核になるのは何と云っても我が母校、有銘尋常高等小学校（当時）である。昨年の夏には創立百周年を祝う式典が盛大に挙行された。一世紀にも亘る長い歴史と伝統の中で幾多の人

材を輩出し、今日の地歩を築いたことを思う時、正に感無量なるものがある。我々が学んだ戦前の有銘校は東西に細長い瓦葺きの校舎と更にその東側に茅葺きの校舎がありその裏手に便所、北側は村の拝所につながるこんもりとした山といった長閑な佇まいであった。が、何と云っても校庭に在った四本の巨大な梯梧の木は形容し難い程の見事なもので正に当時は有銘校のシンボルでもあった。幹の大きさは当時の小学生五・六人で両手を広げてやっと抱きかかえる程の巨木で五月頃には目にも鮮やかな真紅の花を付け樹上で小鳥が囀る様は小学校六年間の一番強烈な思い出としていまでも脳裏から離れたことはない。昭和二〇年頃の空襲で校舎と共に惜しくも焼失したが現存すれば今頃県の天然記念物に指定されていた事と思う。さて有銘尋常高等小学校は昭和一六年私共が小学校三年の頃に国民学校に改められたがいよいよ戦争への暗雲が広がっていく時期でもあった。その前年の昭和一五年には皇紀二千六百年を祝う記念式典が催され「国民精神総動員」の額が掛かった校舎の前では大湿帯を加えた五ヶ部落対抗の記念運動会なども開かれた。その頃から既に米英との開戦は必至という空気が強く翌昭和一六年太平洋戦争が勃発するや日々刻々の戦況や皇軍の戦果について先生方からよく聞かされたものである。昭和一九年頃からは戦時色も一層強くなり食糧増産の名の下に運動場は掘り起こされ畑として利用されるようになった。運動場の周りには防空壕もいくつか作られ同時に避難訓練も頻繁に行われるようになった。そういつた戦時体制下では学業もま、ならず有銘校百年の歴史の中で一番苦難に充ちた時代であったといえよう。我々



昭和40年頃の教職員。(写真提供：翁長ナヘ)

は昭和二〇年三月に国民学校の六年を終了したがその頃既に校舎は焼失し卒業証書さえ貰えなかったように思う。沖繩戦が始まった昭和二〇年四月からは組織的な学校教育は中断され羽地にあった収容所から帰って茅葺きの仮校舎で学べるようになったのは翌昭和二十一年頃からである。戦争で総てを失ない正に無から有を産み出さねばならない苦難な時代でその意味では我々の青春時代は灰色であったとも云える。しかし戦前、戦中そして戦後という時の流れを経てよわいも還暦を過ぎた今でも我が母校は永遠なりと云う気持ちには少しも変わりはない。私は幸いにも昭和三五年から昭和四一年までの六ヶ年間母校の歴史に係わりをもち教鞭を執った事がある。自分を育ててくれた母校で後進の指導に当たったことは生涯の忘れ得ぬ思い出であるが同時に誇りにさえ思うのである。

有銘校の百年という長い歴史に想いを馳せ創立百周年という大きな節目を迎えるに当って二一世紀へのおおくなる発展の年として記念すると共に更に更に母校の輝かしい未来と子供達の幸せと限りない発展を念願して止まないものである。



有銘校の思い出

与古田 清正

元教諭（昭和四一年～四四年勤務）

有銘橋を渡ると、真向かいにへんに油染みた、朽ちかけた小屋がありました。それが有銘の自家発電所でした。そこを右に折れると、慶佐次への道で左に曲がるとそこはどろんこ道で有銘部落の入口です。有銘橋から八〇メートルぐらいでカーブになっていて、今すこし行くと有銘小中学校の校門でした。教室や職員室に行くには運動場を横切らなければならず、めつたに出来ないお客様以外は生徒、職員は裏門を利用していたように思います。（慶佐次の生徒はどうしていたのでしょうか）運動場を横切って職員室にある階段の右手にはオオタニワタリの観葉植物がところ狭しと、しかも整然と植えられていました。街っ子の私にとっては特に印象深く残っています。

私を待っていたのは四五名の二年生でした。「君は中学二年生の担任です。」と校長から言われました。「担任ですね。有り難うございます。」と私は言ったかどうかは定かではありませんが、やんちゃな二年生の担任は赴任前に私に決まっていたようです。

私の授業は一年、二年、三年生の社会科全部と一学年の数学、英語、体育でした。二年のクラスはやはりやんちゃでした。専門

の社会科は別として、専門外の数学などはこの解き方は小学校では…、中学校では…、高校では…の方法がある。とひとり解釈・説明の仕方がうまいと悦にいました。幾年後の同期会で「先生全然わからなかったよ。」と言われ、がっかりしたところがありました。また、数学の時間に黒板用のコンパスの金具の「アイター」といい、コンパスをはねのけたら、私のメガネにあたり、ふっとんだこともありました。

有銘校在職中は特にこの二年生は三年まで持ち上がりでしたので、授業の思い出は沢山あります。いま、頭の中でクルクル、クルクルと思い出が廻っています。授業以外では、宿直中での怪談、カーテンのない宿直室の窓ガラスに顔をくっつけて中をのぞきこんでいる顔を見て、びっくりして悲鳴をあげたら、覗いた村娘がさらにびっくりして一目散に逃げて行くのを見て、一人笑ったこと。台風の余波のある日、元診療所跡の一室に留めてもらったとき、キジムナーにおそわれたことなど、さらに赴任一年目に全職員で、大湿帯に行き教育懇談会をし、ヤギ汁をご馳走になったこと、懐中電灯とハブよけの棒ぎれを持ち、陽が傾き暗くなりつつある山道を家路に向かうのか、死者のお迎えに行くために「カー！カー！」と鳴いているのか、不気味さと、不安、心細さが一度におそいかかり、息もつかずに早足で行った大湿帯の道も思い出に残っています。

有銘校では二代の校長、二代の教頭につかえました。個性ある教師がおりました。ここで教師像を学びました。併置校でしたの

で、小学生、中学生と発達段階のユニークな生徒にも恵まれ、今もってつきあいを持っています。有銘校よ!!ありがとうございます。



昭和28年生（21期生）の女生徒と思い出の一コマ 昭和44年（1969）（写真提供：平田嗣雄）



校庭にて職員とともに。昭和42年頃（写真提供：翁長ナヘ）



単身赴任

宮城 松 一

元教頭（昭和四二～四七年勤務）

私が有銘小中学校の教頭を拝命し赴任したのが今から三〇年前のことで、拾年一昔と申しますので、三昔のことになります。当時の小中学校の教員組織を考えてみますと、校長以下教員は、ほとんどが村内出身者か、校区内出身者で組織されていた事が思い出されます。これは他村や他校区出身になると、交通不便の上に、食料難、住宅難の時代でしたので校区以外の教員希望者は、ほとんどいない状態でした。当時は米軍基地従業員は給料は良い上に、戦果というのがあるので、安月給の教職員よりは、軍作業に行くのが多くなり教員の欠員が生じると、校長や教頭は、教員さがしに、二、三日も歩きまわることが、たびたびでした。私も今日まで自宅以外から、職場へ通勤した事がなく、有銘校への赴任当時の銘小中学校の教頭職をつとめることが出来るか、不安で一杯でした。現在のように道路が整備され、自動車が発達した時代でしたら、有銘、塩屋間でしたら三〇分位で、通勤できる距離ですが、あの当時では、とても考えられない事でした。文化の発達の早いのに、驚くばかりであります。当時私も、教員のかたはら、家族

と一緒に、農業を手伝いながらの教員生活でした。家族が多く、親子三代で拾名家族でしたので、有銘小中学校には、単身で赴任することに、決定致しました。赴任の当日は、有銘小中学校PTA会長饒波正行様始め多くの方々が、塩屋まで車を準備して、お迎えに来て頂きましたことは、昨日今日のような気が致します。現在のように教員住宅もなく、下宿屋などとても引き受けてもらえないので、学校の近くの仲西様の空屋に寝泊まりをし、食事は近くの宮里様の家にお世話になつての、有銘校教頭の職務を務めることになりました。赴任してみると中学校の体育担当の教員がいないので、教頭は体育の教科を受け持つかたはら、教頭事務もやらなければならぬ時代でした。仕事が終わわり、夕方になると、青年達も学校に来る方々もあり、段々と青年達の気心もわかって来ると、時には酒を酌み交わしながら青年達と話し合うことも多くなり、PTAの皆さんや青年のみなさんの気心がわかってくと、今までの有銘が段々と、親しくなつて参りました。一番困つた事は、運動場がせまいことでした。現在の有銘校の運動場は、立派な運動場が出来て居りますが、当時の運動場は現在の体育館の敷地と管理棟のある敷地をならした広さの運動場でしたので、現在の児童生徒では、想像できないほどせまい運動場でした。その上に大雨が降ると有銘川のはんらんで有銘校の運動場や、周辺の民家は水びたしになることがたびたびでした。このように有銘川は困ることもありましたが、時には夕方になると電灯をもっていざりに出て、えびやうなぎを取つて来て、ごちそうになることも、たびたびでした。今では有銘川も昔のような獲物もないの



古宇利島への職員旅行。昭和44年頃。(写真提供：翁長ナヘ)

ではないかと思えます。又校舎の裏の便所の木の上で授業中に大きなハブを生け捕りにするために、中学校の生徒も一緒になってとらえた事が思い出されます。このような楽しい思い出や、五〇才すぎて運転免許試験を一回でパスした事等、むつかしい生徒指導や、生活指導を味わいながら、いつの間にか五カ年が過ぎて、辺土名小学校へ転任となりました。私も八〇才になろうとして居りますので、あの当時の中学校生も、もう四十四、四十五才にもなっているのではないかと思えます。今では、村や字の中堅人物となり、或いは政財界の大物となり、立派な人生を送って居られる方々も多い事と考えます。街で顔を合わせても名前をおぼえている方々がすくなくないのではないかと思えます。最後になりましたが、教え子の皆様方の御健康と、有銘小中学校の限りない発展を祈念して、あいさついたします。



校庭にて 昭和44年 (写真提供：平良農勇)



なかゆくい

平良 明

元教諭（平成四〜平成七年勤務）

「環境が人をつくり、人が環境をつくる」という言葉を実感として味わうことができた有銘校での三年間。素直な生徒たちに恵まれ、協力的で理解のある父母（地域）に恵まれ、楽しく笑いのあふれる同僚（職場）に恵まれ、そうした環境の中で仕事ができ、私には得るものが多い三年間でした。

素直な有銘校の生徒たち。勤労生産奉仕活動で芋栽培や野菜づくりを、炎天の下、あるいは寒い北風に吹かれながら、生徒たちはよく働いていました。農業経験のない私は、むしろ生徒から教えられることがありました。修学旅行の事前学習も熱心に取り組み、事前で知り得た知識を旅行中に発揮してくれました。おかげで楽しく充実した修学旅行を私は二度も経験することができました。地区陸上大会での頑張りは、伝統の棒高跳びだけでなく、「まだまだ」と一生懸命に走る生徒たちの姿に、涙するものがありました。また、運動会で見せた中学生全員による鼓笛隊。全員が真剣に演奏して行進する姿は、有銘校にふさわしい「みんなでひとつ」を感じさせてくれました。静かな恵まれた自然の環境の中で、伸び伸び育った有銘校の生徒たちの素直さは忘れられませ

ん。

環境の良さは自然だけではなかったと思います。家庭訪問したとき、ほとんどの家庭が夫婦で対応していました。それまでに私が経験した学校では母親だけというのが多かったので、両親そろっての対応はびっくりもし、同時に感心させられました。わが子への親の温かい愛情が感じられ、有銘校に優しい生徒が多いのもわかるような気がしました。PTA作業にはほとんどの父母が参加していました。親子グランドゴルフは、有銘校の家庭の良さを表す行事でした。運動会はまるで地域の運動会のような集まりと賑わいを見せてくれました。さらに勤労生産奉仕活動の時の、機械・場所・人の協力、諸発表会の際の奉仕的な協力、部活動への大勢の応援と、いつでも父母の顔が、しかも笑顔が見られる学校でした。温かい地域という環境だから、生徒が伸び伸びと学校生活を送れるのだなあと思いました。有銘校の父母の姿に、教師としてだけでなく、私自身も一人の親としてあるべき姿を学びました。

PTA活動は、PとTが互いに酒を飲み交わし、談話する場所が多かったこともあって、少ない会員数のわりには活動が充実していたように思います。学校環境整備というハードの面での協力だけでなく、PTAでのスポーツ大会というソフト面での活動ができたのも有銘校の良さの現れでした。PとTの親交が深まり、「教師と保護者の関係者としてではなく、友人として今後も付き合える」というある父親の言葉に私も同感する思いでした。人と人とのつながりを感じさせる有銘校のPTA活動でした。

生徒と親に恵まれたおかげで、私たち教師もゆったりと仕事に打ち込める職場になれたと思っています。職場の雰囲気を楽しく、話題にはいつも笑いがありました（笑いすぎて「楽しい職場、進まぬ仕事」という冗句が生まれるくらいでした）。職員で比地川を散策したり、慶佐次川でカヌー教室をしたり、生徒と一緒に旧三月三日の浜下りをしたりと、楽しい授業作りと楽しい職場作りが実践できたように思います。

さらに私は有銘校で「教務」という務めをさせてもらったお陰で、貴重な経験を積むことができました。職員の協力の良さから「なかゆくい」という職員便りを発行しました。職員の談話を中心に、楽しい話、ためになる話、だめな話、とお互いの「なかゆくい」の場として活用されたと思っています。それも職員の和が良かったからできたことだと思います。マラソン出場談、愛の話、授業研究への感想、折句による紹介、PTSバスケット試合の様子、家族の会話などなど、楽しい話題を掲載することで仕事の「なかゆくい」になれたと自負しています。

有銘校を離任するときに、私はこう挨拶しました。

「地域・生徒・職員に恵まれた三年間でした。こんな素晴らしい学校で勤めることは、もう二度とあるめ」

二度と味わえない楽しく充実できた有銘校での三年間。その時になかゆくいできた心のゆとりが、その後の私の教育実践にも活かされています。校歌にもありますように有銘校は「ユートピア」でした。これからも「栄え、栄えよ、有銘校」。



勤労生産学習（平成4年12月）（撮影：山城定雄）



有銘の思い出

兼城 賢悟

元教諭（平成四年～平成七年勤務）

一九九二年二月、有銘校への転勤が決まり、家族で有銘に引越すことになりました。

その際、委員会の計らいで教員宿舎の大幅内装工事も行われ、春休みには新築同様の部屋になっており、三年間、気持ちよく生活することができました。

家族ぐるみで有銘に住みつき、地域住民としてスタートした当初は、うまく地域の人達とやっていけるかという不安もありましたが、そんな心配は全く無用なものでありました。有銘での三年間とても楽しく過ごせたのは、地域の方々の心の暖かさ、妻の主婦どうしの付き合い方の良さのおかげだと感謝しています。それと、課外活動としてのハンドボールを通して子供のみならず、父母との接触の多さや、夜の会合、釣り、ゴルフ、マラソンなど趣味が共通の父親との付き合いも楽しくやっていけた大きな要因だと思えます。

ハンドボールゴールを手作りで作ってくれた平田嗣雄さん。バヤオでのマンピカー釣りを体験させてもらった古堅盛和さん。ゴルフやマラソンで互いに競い合った島袋徳和さんや又古晃さん。

酒の席で、大ウナギの話でむきになり、何度かごちそうに預かった田場兼公さん。ユニークなマンボ踊りが忘れられない崎山喜弘さん。ハンドボールのユニフォームが欲しいと言ったら、翌日すぐに一七万円も寄付を集めて持ってきてくれた具志堅勇さん。ハイケイ汁料理の得意な、有銘の行動隊長サンブーこと仲嶺真伸さん。その他、多数の親といろいろな思い出ができました。

また、有銘校での職員との出会いも楽しさを倍増させてくれたことは言うまでもありませんが、紙面の都合上、割愛させて頂きます。ただ、勤労生産で陣頭指揮をとってがんばっていらつした渡久地勉先生や、にわとりと話ができきた安田新徳教頭先生の計報は大変残念でしたが、お二人の功績は今でも有銘校の土作り小屋や有銘川で元気に泳ぐコイに受け継がれていると思います。

次に家族の思い出を紹介します。

（賢多）九州修学旅行・童話、お話し、意見発表東村代表・ハン

ドボール男女アベック優勝

（伸悟）ハンドボール男女優勝・校内マラソン大会、つつじマラソン三連覇・ハンド部伊江島キャンプ・運動会親子リレー三連覇・東村駅伝大会での区間賞獲得・児童交流の翼で山形県へ行ったこと・たくさんの友達ができたこと

（武）校内マラソン大会で優勝三連覇・三年のとき童話発表会で村代表になったこと・ハンドボールの試合でぼろ負けしたこと・伊江島にみんなで練習試合に行ったこと・四五分の休み時間と友達と遊んだこと

（賢人）きょうたとおともだちになって、よかったです。あるめ



浦添市ハンドボール大会にて
平成6年(1994)11月3日 (撮影:山城定雄)

のようちえんであそんで、おもしろかったです。
 (大)……(幻のステーキパーティ)
 (多喜子) 大ちゃんが生まれたこと・お母さんコーラスでラジオに出たこと・お母さん方と大根づけをしたこと
 最後に、有銘校の創立一〇〇周年をお祝いし、学校及び地域の方々の益々のご発展をお祈り申し上げてペンをおかせて頂きます。



県小学生ハンドボール大会 Bパート男女優勝 平成5年(1993) (撮影:山城定雄)



有銘小創立百周年記念に寄せて

新 垣 善 勇

同窓生（昭和元年生）

有銘小学校の創立百周年を迎え、心からお祝い申し上げます。記念事業期有成会の皆様と区の方々のご協力により、平成七年七月二日盛大に記念式典、祝賀会が催され私達も郷友会員として一緒に参加させて頂きましたが、郷里の皆さんが母校を思う嗜れやかなお姿が印象的でした。創立百年の歴史と幾多の人材を送り出した母校を偲ぶとき、感無量の念一入です。優秀な先生方のご指導と環境が北部の実践校として数々の指定を受けるなど輝かしい実績を残していると聞いています。今後とも母校の益々のご発展を祈念致します。

では、私たちが学んだ当時「二五〇年余の昔」をふりかえって記してみたいと思います

一 校舎とその周辺

校舎は現在の位置に木造瓦葺きで、運動場は今の半分もなく残りの半分に本部落の雑貨屋、散髪屋、煙草屋、協同店、区事務所、有銘部落の中心をなしていた。思えばいかに狭い運動場であったのか想像が付きまします。

二 ウガン山と大ガジマルにデイゴの木

校舎の西側ウガン山の麓に凄いガジマルの太木があった。横に這う様に繁ったガジマルの木は、子供たちの格好の遊び場であったが、そこは神聖な集落の聖域なので、木の枝一本も折ってはいけないのです。実際、ウーマクが居て、そんな事もあるかと木の枝を折る、とたんに全身震えが襲い高熱を出してしまい、この木の下で、マブヤークミをしてもらったらすぐに直った例がある。

校庭には大きなデイゴの木があり当時私達は沖繩一の大きな木と信じ、自慢していた。子供達七、八名で手を繋ぎ囲んだ程の木でした。毎年五月になると校庭一面に真っ赤な花が咲き、暑い夏の日には木陰を運動場一杯作る。それが過ぎた頃の赤いジュウタンと緑のジュウタンはときとして生徒たちの難儀な作業でした。掃いても掃いても減らない赤や緑は今にして思えば、何と贅沢な悩みであった事でしょうか。

三 男女同席の始まり

小学校三年の時担任の新里良雄先生がある日突然「みんな今日から席の組み替えをします。背の高い順に男の子と女の子同じ机に座りなさい」えー、と悲鳴とも聞こえる声が出た。学校始まって以来の出来事です、言われた通り同じく座るも、なんだかきまりが悪く早速こぜり合いがはじまる。男の子は嫌いと女の子はもじもじしている。でも先生の目が届かぬところで机の真中に線を引き、ここは自分のところだと主張する、同席の女の子の手が線の外に延びると、ぱしり平手が飛ぶ始末。なにしろ「男女七才にして席を同じゅうするなかれ」の時代でしたから。新里先生体操



新デイゴ会・新里義雄先生夫婦を囲んで。(写真提供：新垣善勇)

の時間に校庭で、見るのも聞くのもこれまた初めてのフォークダンスなるものを教えたのです。どうしても男と女の子が手を繋ぐねばならず、恥ずかしくどきんどきんと小さい胸は高鳴る、継ぐべきか？そうと横を向いて軽く握ったものでした。しかしそれも慣れるにしたがって楽しく昨日までのおどおどした態度は消えて、ひそかに体育の時間がくるのが待ち遠しくなってきました。この様にたえず新しいことを取り入れていく先生の教育方針はすばらしく五十年余過ぎた今日でも私達同級生の絆は、昔も今も少しも変わらないと自負しているのです。

四 学校の外の遊びと家事の手伝い

山紫水明の集落は石田と福地川が中央を流れて、広い水田に余りある水を満たしていた。自然に曲がった川は、ところどころに深い淵をつくりそこがウーマクどもの格好のプールになり、水に親しんだものでした。また、川縁の茂みにザルを突っこみ手足でゆすると、小エビがいっぱい取れた。食料事情のよくない当時のタンパク源になった。小学校も三年四年になると、子守等の手伝いがまっていた。

背中に小さい弟や妹をおぶりながら、蹴鞠や陣取り等の遊びに夢中になっていた。

五 修学旅行と学用品の買い出し

小学校六年と高等科二年卒業間近の二クラスが、在学最後の思い出として首里や那覇に行った。なにしろ交通事情が悪く、片道二〇里余の道程を歩け歩けの旅です。一日目は宜野座の学校に泊まり、二日目に与那原までたどり着き軽便鉄道に乗り、目的の那

覇まで着いたのでした。大きな町に山形屋デパート、県庁、首里場に龍潭池、さらに護得久御殿と桃園農園、小緑的那覇飛行場等が今でも深く記憶に残っています。次に学用品の買い出し、本や帳面と筆記用具は本当に貴重品で鉛筆等はちびるまで大事に使い、どうしても足りない分を隣近所の子供達のをまとめて高学年の生徒たちで名護に買い出しに行った。往復四〇キロも歩かねばならず、しかも途中源河の山道に恐いハジウシーがある。昔有銘と源河の男女が相思相愛の後に思いかなわず死んだ悲恋の地、あまりの痛々しい姿を道行く人達が木の葉で隠したと言う。真新しい本の感触と、何よりも美味しいソバを食べて満足だ。そしてつい帰りの時間が遅くなり、ハジウシーを通る頃は、夕暮れとなつてしまった。タイマツの灯りに写し出すハジウシーのなんと恐かつたことか。声をはりあげて「ティンニカワリテフギラウツ」我等日本帝国少年だ。ユウレイなんか恐いものかと強がった。思出の一つである。



百周年記念式典では久しぶりに顔を合わせて再開を喜んだ。(写真提供：新垣善勇)



母校と山河のかかわり

国 吉 真 宏

同窓生（第三期生）

有銘小学校が開校一〇〇周年を迎えることは、まるごと一世紀の歴史を刻んできたことであり、それぞれに感慨深い思い出があると思う。私は昭和一七年に有銘国民学校に入学し、昭和二六年に同中学校を卒業するまで九年間、有銘川を前にしての勉学期間であった。ふり返るといろいろな思い出がある。

戦前の期間（国民学校一―三年）は裸足に何も弁当持参の通学でしたが、特に担任の先生に対する思い出が深く、「欲しがりません勝つまでは」と言い聞かされた先生方―仲松洋子先生、座間味朝子先生、島袋ヨシ先生―のお姿が昨日のように頭に浮かんでくる。

また、終戦後は、日本の敗戦を境に世の中が一変し、学業は青空教室にはじまり、米軍払い下げのテント教室、後に茅葺き教室になったものの、床もなく、土間に簡単な机を並べただけの粗末な教室で行われた。そのような中で新垣善保先生作詞作曲の有銘校音頭（アルメナー）による全校ダンス、高校進学の受験試験で茅ぶき教室の天井に鉄パイプを敷き並べて、又吉慶典先生、福山朝秀先生等と寝泊りしたことなどが懐かしく、貧しい学園生活で

はあったが、新しい時代を求める気迫は芽生えていたように思う。
有銘川の思い出

最近、山城定雄氏（東村役場企画課）が沖縄タイムス紙の唐獅子欄に寄稿された「有銘川を清流に」を読んで昔の有銘川を思い出した。川の水量は今よりはるかに多く、学校の前の「メーヌハマー」や福地又入口の「イーヌクンジー」の深みは、学校帰りに泳ぎ場所としてよく使われていた。思えばこの川の流れば、悠久の歴史の中で有銘校のこしかたを見つづけてきたし、これからもずっと見守っていくことでしょう。この川の主流は、福地又を登り、上流は源河への道沿いに旧羽地村との分水嶺に至っている。

源河への山道

昭和四〇年代の前半頃まで有銘から源河に出る道は、牛馬がやと通れるくらいの狭い山道で、約二里（八KM）の道程になっていた。有銘から都会へ出るには唯一の近道であり、有銘に住む人々にとって貴重な生活路であった。

戦後、私の家はその道添いの開墾地に建つ人里離れた二軒屋であった。しかし、意外と往来の人々は多く、ナカユクイ（休憩）の場として親しまれていたもので、情報の早さ、豊富さにあつては時の先端を行っていたような気がする。それに祖父が頑固タンメーではあったが漢学者めいた人で話好きでもあったから、道行く人々を引き付けていたのである。さしずめ「峠の茶屋」といったところでしょうか。

生徒の係わりでは、新学期前になると上級生は教科書を買いに名護の町まで往復一〇里の距離を日帰りで行かなくてはならなかった。



昭和29年当時の有銘川での洗濯風景。東村史より（撮影：トーマス w マレッキー）

は日が暮れて家族にタイマツで迎えられたこともあったという。また、出征兵士を全校生徒で小旗を持って村はずれまで見送っていた時の道、更には、米軍に捕虜にされたとき子供まで重い荷物を背負って収容所に出ていった苦渋の道等々有銘に関する歴史を綴ってきた道である。とりわけ、小学校から高等学校まで多用してきた私にとっては、学校への道、文化への道であった。

ふるさとに思うこと

ふるさとは、その地を離れた者にとって心の支えである。折々にふれる思いを記録に残していきたい。幸いに家内茂子が短歌をたしなんでいるので、その表現に活かせるのではないかと思う。これまで詠んでいる中から数種拾ってみた。（第三八回短歌研究

新人賞佳作入選を含む）

- 杳き日に広しと思ひしふるさとは周りの山にちぢこまり見ゆ
 - 高鳴くはクイナの声が分け入りしイタジイの森空を覆へる
 - 荒磯の岩のあはひの砂溜まり踏めばかすかに濁く音する
 - イジュの花白く咲きたり人の世の愛憎なべて超えたる位置に
 - 天近く居てアルプス連山見渡せば時間もわたしも白くとどまる
- 永年の歴史を織りなしてきた源河への山道は、今では便利なアスファルト道路に変わっている。ふるさとは母校を巣立っていく若者たちに限らない発展の出口であってほしい。



校舎も成長する

島 袋 護

同窓生（第六期生）

中南部慶佐次郷友会長

山紫水明の地にある母校有銘小中学校の百周年式典に同窓生として参加させていただいた。校庭に足を踏み入れ学校内外をくまなく見て廻った。隅々まで見せてもらったのは実に二〇年振りのことであつた。まず、校舎が総てコンクリート建ての立派なものに変わっていることに驚かされた。私が在学した終戦直後の昭和二〇年（一九四五年）代の痕跡を見つけることは最早困難であつた。当時校舎は総て木造茅ぶきで、しかもすべて手作りであつた。ような記憶がある。現在のように学校施設に対する公的な補助制度など全く確立されてない戦後の混乱期のことであるからいたしかたないとしても、当時から子供達の教育環境の復興整備に有銘校の教職員、父母達の注いだ情熱は生半可なものではなかつた。有銘校は伝統的に当時から文武両道に手を抜かずきちつとやるという美風が既に培われていた。山あいの小さな学校が生きのびていくには、人材の育成以外にその術がないことを先人達が経験則の中から見出し出していたと思われる。学校環境造りのため校舎やグラウンドの整備に父母達が労を惜しまなかつたのもむべなるか

なである。しかし現在の校舎や、体育館、その他の施設の充実振りを見るにつけ今昔の変容ぶりにただただ驚くばかりである。校舎で思い出すのは、記憶がもう定かではないが、当時私も父母達がオオシツタイ辺りの山中から切り出した校舎建築用材（あるいは補修用材だったか）の搬送のため生徒総出で石田集落の上のオオシツタイ入口まで出向き丸太を肩に食い込ませながら学校までの二キロばかりの山道を四苦八苦しながら進んだ記憶がある。このように苦勞して出来た床もない粗末な校舎であつたが、勉強に不都合があつたという記憶は全くない。当時先生方がどのようなカリキュラムや教材のもとにどのようなことを教えていただいたのか、その辺りはすっかり忘れてしまつているが、材木運搬のことだけは、どういう理由か今も鮮明に覚えてゐる。人間の脳は、つらい事は早めに追い出してしまひ、楽しい事のみ記憶素子に留めようとする習性もあるらしいが、このことからすると材木運搬は苦業ではなく楽しい事だつたに違いない。単独の日常的な行動はなかなか記憶に残らないが集団でした行為はそれがかなりつらいことであつても後々まで覚えてゐるものである。遠足や修学旅行などの団体行動は大人になつてもなかなか忘れないでゐるのはこのせいである。いかに皆んなで力を合わせて目標に向かつて行動することが大事なことかの証明でもあり、学校教育の原点もこの辺りになければならぬと思つてゐる。有銘小中学校には、昔から現在に至るまで生徒同士の強い連帯感が脈々と受け継がれており、都市地区の学校に見られる個人主義的傾向、非行化、いじめ等の現象は皆無だと聞いている。苦業を共有し、共生する素敵

な伝統美風が今に生きているからに外ならない。すばらしいことではないか。有銘も慶佐次も良い意味での競争意識を高めてお互いに切磋琢磨し学校の活性化に今後ともがんばってほしいものである。校舎は本来、無機質であるが、戦後の半世紀で終戦直後の青空教室から茅ぶきへ、木造瓦ぶき、ブロック造り、鉄筋コンクリート造りと時代と共に子供達と共に成長してきた。進歩の度合が格段にスピードアップしている現在、二一世紀の校舎がどのように変貌していくのか、ハイテクの固まりになるのか、あるいはコンピューターなどの先端技術の進歩で校舎などいなくなる時代が来るのか。学校現場がどのように変わっていくのか、現段階で予測することは全くむづかしい。しかし今、久し振りに母校を訪ねて見て感じたことは、学校がどのように変わろうとも、ここから巣立って行く子供達が受けつがれた豊かな伝統と感受性をもとに一人の人間として、この多難な時代



昭和30年当時「創立60周年」の校舎（写真提供：翁長ナヘ）



昭和43年（1968）当時の校舎（写真撮影：平良晨勇）

をしつかりと生き抜いてくれるに違いないという確信であった。成長する校舎と共に在校生の皆さん、校区のお父さんお母さん、そして教職員の皆さん、本当に百周年おめでとうございました。どうぞこれからも頑張ってください。母校の限りない発展をお祈りします。



母校と山河のかかわり

沼倉 佐智子

(第八期生)

ふるさととは遠くにありて思うもの、そして哀しくうたうもの……この詩に哭いたあの一時期、そして今もなお、この詩がこよなく懐かしい。

有銘中学校三年の帥走の半ば、全校生徒に見送られブラジルへ移住するためバスに乗った私。あの日からすでに四十年も経過した現在もあの朝の光景は今でも鮮明に脳裏に蘇り目が潤む。ほんの少しでも一緒にバスに乗り込む同級生、可愛らしい後輩達が振るさよならの合図、殆どが有銘校出身であった先生方、優しくった村の人々、別れの言葉すら言えなかつたときようだいな達の顔、茅葺き屋根の校舎、仏桑華ともくもうで縁取られた校庭、夏にはタナガールを獲り泳いだりした有銘川、等々、全てが遠ざかつて見えなくなつた時の切なさは言葉では言い表せない。

自ら強く希望、両親を説得して行つた外国であつたが、常にふるさとや有銘校のことを忘れることもできず、望郷の念に悩まされつつも、夜学にも通い、ブラジル人経営のお店や銀行でも働き、ブラジル人は勿論、多くの外国人とも知り合い、かけがえのない豊かな人生経験をしてきたのが、せめてもの救いであつた。

結婚して三人の子も授かり、沖縄に帰りたいたいという想いもうすらぎかけていた頃、突然の夫の交通事故の後遺症を機に一家五人、我がふるさとに帰つてきた。

運命のいたずらともいえる帰郷、複雑な心境であつたが、なにはともあれ、再びこの地で生きていける喜びはいいつくせなかつたが、あれほど恋焦がれたふるさとの風景は変わり、かつては隈なく耕されていた段々畑は山林と化し、水量豊かだつた田んぼは草茫茫々、あの美しかった村はどこへいったのやらとしばし呆然とした。

時は昭和四十八年七月、夏休みの真つ只中、実家の庭先とも言える有銘校の校庭では、新任の仲本輝雄先生がブラジルで盛んなサッカーを男子中学生を相手に一生懸命特訓している光景がとても印象的であつた。

そして、九月、長女は小学校一年生に編入、長男は幼稚園へと、有銘校の門をくぐつた。

奇しくも、我が子らを迎えて下さつた教頭は、十八年前、担任として私をブラジルへ見送つて下さつた平良農勇先生であつたのが感慨深かつた。

茅葺きの小屋の校舎は跡形もなく、鉄筋コンクリートの素晴しい建物、脱脂粉乳をお湯で混ぜてミルクを作つていた小さな茅葺き小屋の代わりに、立派な調理場で炊事された学校給食の豊富なメニュー、夢の夢と思われたピアノがどーんと置かれた音楽室、読む本さえ限られていたあの頃と比べ、豊富な単行本等がずらりと並べられている図書室、殆どが先輩達であつた先生方の代わり



昭和28年頃同級生らと
(写真提供：平良農勇)

に名護方面から立派な乗用車で通勤なさる先生方、裸足で登校していた児童生徒達の姿はどこへやら、等々、全て変貌し、時間の流れ、時代の移り変わりをまざまざと見せつけられたものである。その内、次男も有銘校の門をくぐり、遂に三人の分身を懐かしい母校で学ばせることができたことは、たった一人で遠い外国へ行った私にとってはおおいに意義深く、限りなく幸運であった、しみじみ思った。

そして今、私の半生と有銘校との結びつきを回想するに当たり、この地に生まれ育ち、私の人間形成に大きな影響を与えてくれた有銘校で学ぶことができた自分は、とても恵まれていたと感謝の念に絶えない。

三方を山に囲まれ一方を海に面したこの静かなたたづまいの中に息づく心優しい村の人々、素直で積極的な児童生徒が学び、立派な先生方で構成されている有銘校が今後、益々繁栄の道を辿り、優秀な人材を世に送り出す環境を維持できるよう祈念する。



昭和20年代の学校周辺の田園風景 (写真提供：具志堅興徳)



母校での思い出

比 嘉 康 夫

(第十五期生)

「兎追いしかの山、小鯛つりしかの川、夢は今もめぐりて、忘れがたき故郷」、おなじみの唱歌「故郷」である。

小中学校の頃の故郷での思い出は、ほとんどが学校での出来事につながっており、この「故郷」の歌を唄うたびに又聞くたびに、母校有銘小中学校での思い出が頭をよぎり、なつかしさと故郷があることのありがたさを思う。

小学校五年か六年の頃か定かではないが、寄川ハツ先生の音楽の時間に先生のオルガンにのせてこの「故郷」を皆んなで唄った日、その日は冬の寒い日で校庭に降る白い小雨をみながら妙に淋しい気分になったことを三五年余の今になってもはつきりとその時の情感と風景がよみがえってくる。

秋の運動会もなつかしい抒情として心の残り、ありし日の風景が浮かんでくる。ソテツの葉で巻いた校門のすばらしいアーチ、手造りの万国旗が翻る運動場での入場式、男生徒は白のランニングに白いハチマキ、女生徒はブルーマーに赤いハチマキで勇んで行進したものである。

当時は、どこの家も大家族で五、六人の兄弟があるのが普通で

あり、大人達も日々の苦しい生活での愉しみもこれといってなかったので、運動会となもると、家族総出の部落をあげての一年の楽しい行事のひとつであった。運動場の周囲の木かげをうめつくした大勢の父兄、運動場の東の方から慶佐次、照久、石田、福地……とそれぞれの父兄が陣取っての見物であった。特に部落対抗リレーともなると、走っている選手が自分の部落の父兄の前を通過する時の応援は、コースの白線の前まで父兄が歩み寄り大きな声と拍手でつつむというすごい応援合戦があり走っている子供も胸がふるえたものである。

このように楽しい運動会であったので、閉会ともなると何か淋しい思いがした。陽が西に傾き、秋の肌寒さを感じ、空にはタカ(サシバ)が輪をかいていた情景が秋の運動会の閉会式のイメージとして焼きついている。

学校生活での思い出は、秋の運動会の外にカーサ弁当の春の遠足、となり近所から餞別をもらった修学旅行、福地の山奥にある杉山での伐採作業、部落対抗の陸上競技大会、等どれもこれも懐かしい風景が思いおこされる。

戦後五十年という歴史的な節目の記念すべき年に小中学校の設立百周年を迎えたことは、感慨深いものである。戦前の五十年、戦後五十年の二世紀にわたりあの山狭の小さな母校が多くの卒業生を世に送りだしたことについて「母校よ、ご苦労さん」という気持ちに先に立つ。

私達、昭和二十二年生は、戦後のベビーブームのいわゆる団塊の世代であるので同期の学友も四十人と多かった。一つ上、二つ



昭和30年代の運動会の様子。
写真提供：上（平良農勇）下（当山全伸）



上の上級生は、十五人程度であった。中学校三年の頃には、全校三百五十人程度の在校生がいたかと思う。

百周年を迎えた今、学校の様子は当時に比べ立派な体育館があり、プールありで近代的な施設整備がなされ、運動場も別敷地に大きく整備され教育環境はすばらしく向上している。

しかし、生徒数は過疎化の波で年々減少の一途をたどり現在は六十人程度になっているようで、チョッピリ寂しい気がする。幸いに、生活環境も都市地区に近づいており、地方分権という地方を活性化しようという行政の流れや、自然にふれる生活への回帰ということも生活の動きとしてあることから、徐々に村の人口が

増えていくものと思われる。是非そのようになって、又、当時のように多くの生徒が学ぶ学校へ戻り、大きな運動会ができるようになってほしいものだ。

故郷へのこだわりと思いは、年を重ねるごとにふくらんでいくように思える。私も、いずれの日か村へ帰り小中学校の子供の頃に毎日眺めた故郷のあの山、矢ののもとで生活をしたと考え今日この頃である。



回想録

新里 吉 弘

(第十五期生)

有銘小学校創立百周年記念誌への執筆依頼の手紙をいただき、うれしい半面、思い出が多過ぎて、どうまとめ、何を書いたらいいのか、少々とまどいながらも、私の回想で良ければ、という思いで筆をとった。

我母校は切り立った山麓を背にし、正門を隔てて四五%の見上げる角度の左右視野いっぱい連なる一年を通じて紫色の山並みと、三角洲の盆地が川の上流(福地)まで開けた地形の中心(本字)に位置する。

春は盆地一面の稲田を抜ける風が、若苗の薫りを運び、夏は、放課後ともなると学校の前を流れる川下の土堤にカバンを放り投げ、慶佐次の級友と水泳に興じ、秋には空を覆うばかりのサシバの大群が、悠然と弧を描きながらゆっくりと南へ渡る光景が懐かしい。学友、先輩、後輩は我が心の父であり、清楚でありのままの手つかずの豊かな自然が我が心の母であると今にして思う。

私を通った昭和三〇年代は、自然の中で学び、歩き、育まれたという思いが強い。学校の田をうち、稲を植え、除草そして収穫、脱穀と生産の喜びを体験した。そしてもう一つの思い出は、学校



収穫後のアイスクーキはうまい。昭和38年頃(写真提供：当山全伸)

の裏手の三K程の細く折れる山路をたどり、学校の杉山に行き、杉林の手入れを男子、女子生徒の区別なく行い、汗を流したことである。帰路は切り取った灌木を材料にと、難儀もいとわず、右肩、左肩と交互に担いでやっとの思いで学校まで辿り着いたものである。

あれから三〇数年が過ぎた。私にとっては宇宙の彼方よりも遠い遠い思い出である。時代は人を育み、そして人が歴史をつくる。回想録は、時代の針を戻し、温故知新ということを認識をすることによって、現世代の母校に学ぶ後輩が、卒業後いつの日か母校を慈しむような思い出をたくさんつくって欲しいと望むものである。

小中学校の多感な時期が人間形成に大きな影響を及ぼす。恩師との出逢いは偶然の産物ではあるが、恩師から授かる教養は、偶然という出逢いの中で、人間の一生のうちで、最も輝きを放つ頃であり、当然ながらやり直しのきかないすじ書きなきドラマである。このすじ書きのない人生ドラマの最も大事な時期に、演出と主人公の、二役をどのように演じるかは、過ぎ去りし目を懐古する時に思うものである。

有銘小学校百周年は、新たな歴史の始点であり、そして通過点である。百周年事業のほんの一部に私も参画できる喜びは、さらに一〇年、二〇年先に再び記念誌を綴るかも知れない同窓の皆様が、懐かしく読んでいただければ、私の役割は一くぎり着いたのだと思わずにはいられない。

有銘校の永久の発展を祈念し、つたない私の回想録としたい。



懐かしい恩師。 昭和37年（1962）（写真提供：翁長ナヘ）



思い出

翁 長 良 成

(第十六期生)

創立百周年、おめでとうございます。卒業生の一人として、大きな喜びと誇りを覚えます。

私の多数ある思い出の中でも特に印象深いのは中学三年の辺土名地区球技大会バレーボール競技での初優勝である。優勝の瞬間、応援団は総立ちとなり、先生方はじめ我々選手団も興奮状態になり、審判の制止も無視して、コートの中で抱き合った事が今でも昨日のこの様に思い出されます。先輩方が幾度も挑戦しながら、実現できなかった悲願の優勝を達成することができ現実のものとなりました。慶佐次、有銘の優勝パレードで両区民の皆さんの盛大な祝福を受け、学校に着くと早速祝賀会となったが、あの日の感激は、今でも忘れることがありません、当時は体育館施設はもちろんありません、練習コートは運動場で、ゴムボールを使用したの練習でした。ボールは先生方の手作りであった。雨天時の練習は大変苦労しました。天候に左右されながらも練習に練習を重ねて、試合に臨む事になったが、試合当日も午前中は雨で最悪の条件であったが中断を繰り返しながらも、試合は続行された。一回戦対佐手中には二一〇で勝って、幸先のよいスタートとなり、

二回戦は東中に二一〇、三回戦には優勝候補の楚洲中と苦戦しながら二一で取り、決勝戦に臨んだ。相手は敗者復活戦で上がって来た佐手中である。予選グループ戦で一度は勝っているのに、全員がリラックスでき、チームの持ち味が出るように二一〇のストレート勝ちで優勝することが出来た。島袋先生を先頭に、ご指導の先生方の情熱と優勝への執念が我々選手にも伝わって来るのが、感じられた。また、自分達も小学校から中学校まで、同じ校舎で学んだ仲間であり、兄弟関係にありましたので、団結の決意のもとで全員が一丸となり、頑張った結果、初優勝という目標を達成する事が出来たのだと思います。

全島中学校大会には何とか出場して自分達の力を試してみたいと、強力にお願したところ、宮城校長先生はじめ先生方が中心となり、慶佐次、有銘の両区民の皆様方の寄付集めにより、大会に出場することが出来ました。私達は、先生方はじめ区民の皆様方の理解と協力に応えるべく選手全員で優勝を誓い合ったものです。大会が近づくにつれて、自分達のレベルをどこまで発揮して戦えるか、不安の中にも出場できる喜びで厳しい練習にも全員で頑張ってきた。そしていよいよ全島中学校バレーボール大会への出発である。監督・島袋、コーチの平田、臨時コーチ上原の先生方、そして選手は、前衛はセッター平田を中心に古堅、寺田。中衛はレフト私翁長、センター佐久本、ライト仲松。後衛は仲泊、比嘉、饒波、控え選手の又吉、諸見里、石原の計一二名で参加した。大会は仲西中学のグラウンドで各地区代表チームの参加となった。開会式が行われ、予選グループ戦では、対読谷中に二一〇

と勝ち二日目の決勝トーナメント戦は、優勝候補の神原中である。練習量、試合経験とも豊かで攻撃力のある同中学に二一〇で敗れた。併し私達には此処までこれた喜びと、貴重な経験を得ることが出来たという満足感があつた。先生方のご苦労とご指導によるもので敬意を表し感謝申し上げます、中学時代の先生方の情熱と人間性のすばらしさを私は学ぶことが出来ました。それと同時に区民の皆様、物心両面の温かいご協力和に激励に深く感謝申し上げます。ふるさとの心優しい皆様方に生まれ中学時代を送ることが出来た事を、誇りにおもっています。

私は高校で教鞭を取りながら、バレーボール部の指導を、しております。物質的に豊かさの余裕が欠けているのではないかと思われる昨今、部活動を通して、文面両道をモットーに人間教育をしていく所存です。緑の山々と水量豊かな有銘川にかこまれた、我母校で自然と人々との触れ合いが教育にとつていかに大切なものであるかを教えていただきました。恩師と区民の皆様方から学んだことをいつも心に刻み今後とも一步一步粘り強く前進したいと思っております。そして最大の目標である「全国制覇」を目指して努力していく決意です。最後に、母校の発展と後輩諸君のご活躍、そして区民の皆様のご多幸を心からお祈り申し上げます。

辺土名地区球技大会初優勝の記念スナップ昭和38年
(写真提供：当山全伸)



有銘中学校16期会 昭和45年6月6日
(写真提供：翁長良成)



有銘校の回想録

玉城 武輝

(第二十期生)

有銘に住んでいたのは、六年間だった。小学校五年から中学三年までの五年間、そして、高校の一年間である。入学した高校は名護にあり、そこで下宿していたにも関わらず、高校の一年間を含めたのは、月一回は家族のもとに帰っていたからだ。なぜ高校時代を含めてまで、この六年間にこだわるかというと、僕自身、それまで、またそれ以後も六年以上、一カ所に住み続けたことがないという理由からである（正確には九六年現在は記録が破られた）。そして小学校の高学年から中学校を卒業するまでの多感な時代を、自然に囲まれた有銘でお世話になったということが、“第二の故郷”ともいえるべき郷愁を誘うのである。

「有銘」と聞くだけで、月光でキラキラと輝く有銘湾や澄んだ水が流れていた有銘川、麦やイモの段々畑、石田、福地、本字、照久に広がっていた豊かな水田、開墾のバイン畑などが次々と浮かぶ。その風景が消えた今、学校も、川も海も昔日の面影をとどめるものはほとんどない。ただ、僕の場合は、変貌を遂げる前に有銘を去ってしまったことが幸いして、その懐かしい風景の一コマ一コマが、脳裏に焼き付いて離れないのである。年配の方々の時

代には遥かに及ばないが、私が過ごした昭和三七年から四四年代というのも、有銘の“原風景”がしのばれる時代だったように思う。

我が家族は、両親の仕事の関係で、私が五歳の時に生まれ島・今帰仁村を出て、本部町瀬底島、東村川田、そして有銘へと流れてきた。小学校二年生の時には一年間で二つの学校に通学するなど、結局、小学校五校、中学校一校、高校三校。そして一つの大学を経験した。おかげで、多くのドゥシグァーができた。

当時は道路事情、交通事情が悪い上に、自家用車を所有している人が少なく、その前に運転免許を持っている人がかなり少なかった。現在は、例えば名護から大宜味村や国頭村にも通勤できる状況にある。当時は親が転勤するごとに、トラックに家財道具を積んで転校しなければならなかった。“転校は”僕たちにとっていつも緊張を伴う一つの事件であったが、母の苦勞は並大抵ではなかっただろうかと思う。

有銘で最初に住んだ家は石田の元診療所だった。大きな瓦屋で、台所も入れて部屋が六つあった。一つの部屋だけはクギが打ちつけてあって入れず、破れたガラス窓から薬のビンが幾つも見えた。患者が亡くなったところから幽霊が出る、などのうわさがあった。確かにそんな雰囲気は漂ってはいたが、しかしついに幽霊に出会うこともなく、中学に入って本字に引越した。ここでの遊びの一つが、家の前を流れる有銘川の河原での炭焼きだった。家のとなりに精米所があり、そこから吐き出されるモミを河原に運んで山盛りにし、その中に山から切り出してきたばかりの青い木

を何本も並べる。火のついたモミは一晩燃え続け、翌朝には見事な炭が出来上がった。

学校の正門から有銘橋までの土手ではフナはよく釣れた。草むらをかきわけ、釣糸を垂れたとたんにグイッとくる。釣り上げてまた、糸を垂れる。その瞬間に引きがくる。心が躍るその繰り返しで夏の日が過ぎていった。カエルを餌に、たんぼの隅でウナギをとったことも懐かしい。あれほど脂がのつてうまい大きなウナギを以後、口にしたことがない。

うりずんの季節には、朝露が光る畑に繰り出し、作物を荒らすアフリカマイマイを空き缶一杯に満たして登校した。学校に集められたマイマイは、村が買い上げる。その金は学校運営の費用になる。また時々、学校に薪（たきぎ）を持参した。それが給食時のミルクを温める燃料になった。更に油瓶以外の空き瓶（一升瓶）も学校に持っていった。それを売って得た金も生徒会費になる。学校はサトウキビ畑、マコモの水田、杉山を持ち、生徒が手入れし、収穫した。それも学校運営の費用にあてられると、聞いていた。

夏休みの宿題は、山から切り出した竹で作る外箒（ほうき）と雑巾だった。遊ぶだけ遊び、夏休みも終わりに近付くと大慌てで竹を切り出しに山に出掛ける。五、六日、庭先に放っておいて葉を落とし、長さをそろえて針金で縛り上げると外箒が出来上がる。学校の運動場をグルリと囲んでいたモクマオウの葉を掻き集める清掃時に、この箒が絶大な力を発揮した。野球もバレーボールも、そしてギターや音楽の楽しみも有銘で覚えた。

中学二年生の時、修学旅行で中城城跡や首里の琉球大学を訪ね、那覇市の少年会館に泊まった。最高だった。同じメンバーで同じコースを再び辿ってみたい——。込み上げる気持ちで三、四年に一度のクラス会を楽しんでいる。



小学6年生の運動会において 昭和40年（1965）（写真提供：平良農勇）



有銘中学卒業記念 昭和43年（1968）（写真提供：山城定雄）



20期卒第1回同期会 昭和47年（1972）（写真提供：山城定雄）

第十章



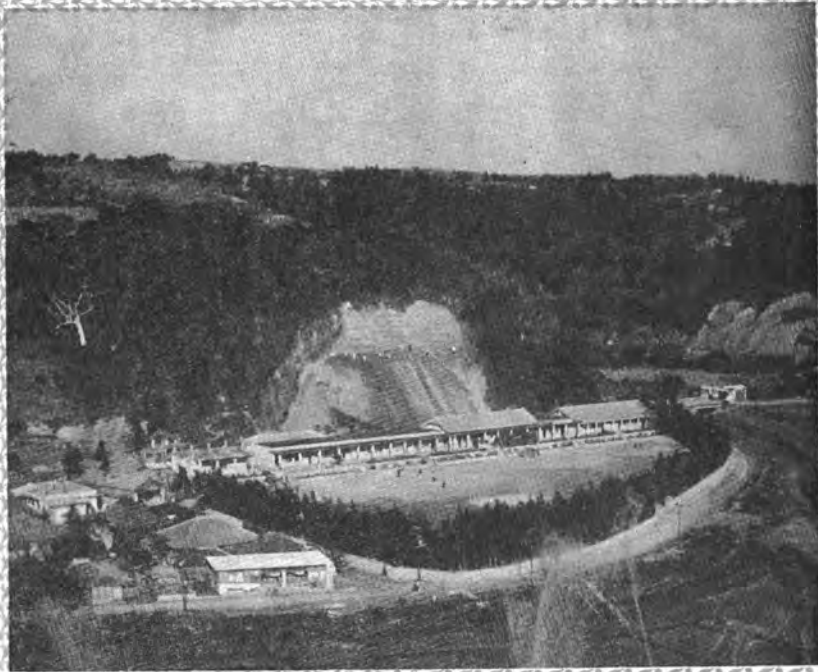
PTA作業、ジュージー弁当に舌鼓。
平成5年(1993)6月3日(撮影：山城定雄)

資料編

創立七十周年

記念誌

昭和41年2月



有銘小中学校



有銘校々歌

元気よく ♩ = 108

松根 盛秀 作詞
渡辺 政一 作曲

やまむらさきにうみあおく
 ばんこにきよきあるめがわ
 そうがにまするまきなみの
 おともゆかしくひびくはり

有銘校々歌

一、山紫に海碧く 万古に清き有銘川

足下に寄する漣の 音もゆかしく響くなり

二、恵み豊けき天然の 楽園に建つ有銘校

若き健児の血はたぎり 希望は躍る胸の中

三、げに東海は果しなき 学びの道の象徴なり

正しく強く鍛錬へつつ 理想の岸に進まなむ

四、進みて止まぬ文明の 時代の潮に乗りて起ち

誉あげなん我が母校 築かんかなや

ユートピア

五、おごそかに照る朝日 子の光に萌ゆる

山の緑色 これぞ母校の姿なり

栄え栄えよ 有銘校



ま え が き

現東村議員 島袋松次郎

輝かしい七十周年祝賀行事の一環として、長い歩みの母校の記念誌を作成するに当り浅学非才の者が本誌に私見を記す事は、いささか気がひける思いがします。母校も七十才と言う、お年寄の仲間入りする年となりました。

私等の入学の頃、母校は三十を少し出た分別盛りの若者でしたが、校庭にはデイゴの大木、松の大木で周囲を庄する堂々たる風格でした。あれから年月が過ぎ、母校の（ククマト、グンジュウ）四十九才のお祝の頃、あの目まぐるしい、二次世界戦争も終り、その苦しみも乗り越え、現在の若返つた立派な二世校舎が出来、学校と共に年をとつた我が子達が社会人となる基礎造りの義務教育課程を受けているのは喜びと共になつかしく思います。

◎ 教育は家庭から

子供が出来るのは、世のすべての親の喜びとするとされており、昔も今も変りない事と思う。出産当日の両親の喜びは勿論、六日満産又は一ヶ月満産の御祝い、それは親の喜びだけでなく地域住民の喜びでもある。

而し親は出産当日から、子供の養育の義務を負はされている。幼少の頃の子供の健康は親が一番気にする事ではないでしょうか。なぜなら小さい当時の健康そのものが、長じてからも大きく影響があると言われているからです。

幼児教育は、親自体がするのであるから、それを考えた場合、父母はどの様に子供の養育をなすべきか、我が家での教育方法はどうかすれば一番効果的であるかと、その結論は自から出ると思っています。

幼少時に起きた色々な事が深く脳裏に残る事ですから、それをわれわれが思い合わした場合は、子供の養育と訓練の基礎となる原則は何かと理解する必要が出て来ると思えます。

子供を健康（肉体的、精神的）に育てなければいけない事実だと思ふ。両親の義務、その自然の法則を学ぶべき必要がないでしょうか、それが出来ずして、子供だけを責めるのは、親の最大の罪と私は思ふ。

父母が子供に良い素質を養う事を念願するならば、子供を正しい取扱ひ方をすれば良いではないか、そうする気持ちになり努力すればどんなすばらしい子供達が出来て、社会を向上発展させる事でしょう。

子供は常に親の行動を見ています。親の素行が極度に敏感に子供達は感じます。父親も穏やかでなければいけないけれども特に母親は穏やかであつてほしい。それがどんなに子供達に利益になる事か測り知れない位に関係があると思ふ。われわれは子供に対して常に穏やかであるように心掛けたいものです。



◎物心ついてからの心理教育

小中校の頃は一日二十四時間のうちの三分の二、要するに十六時間は家庭にいる訳であります。子供達にとつても一番家庭が魅力的ではないでしょうか。その家庭的最大の魅力は母親ではないかと考えます。前項にも述べた様に子供は、すべての面に敏感でありますから母親の言葉で喜びもし、不快にもなる事と思えます。そう言う事を考えると、母親の愛情こもつた言葉がいかに子供達の心に結びついている事かはお分りの事と思う。

子供達の小さな喜びでも親も一緒に喜びたいと思ふべきではないでしょうか。

子供達のなす事、親はどんな些細の事でも冷淡に取り扱つてはいけません。小さな悲しみでも親も一緒に悲しみ、小さい喜びも共に喜び、親の同情と同意の心を彼等に良く分る様にすべきではないでしょうか。すくすくと成長していく子供達に、一日中楽しくさせるのが家庭での一番重要な事ではないですか。

要は、親でも子供と同一気持になつて子供の信頼を得る必要があるかを考えるべきでしょう。悪い行いを効果的になおす事も先づ親が子供に信頼されているか、否か、に結論が生まれるのではないのでしょうか。

親の利己的精神ではいけないと思う。昔の封建時代の親も未だに見受けませんが、甚だ悲しい事だと思えます。そう言つた方々に子供を私物的ものの考えを捨てなさいと私は言いたい、子供達は社会の子である事を認識してほしいものです。子供に信頼される親になれば適當の時期に注意し、愛によつて子供の心を正しい方向に向けることができ、立派な子供の美しい、感じいい性質の子供を養うことが出来るのではないですか。但し、母親は子供に依頼心の強い、自己中心主義の子供にならない様に心掛けるべきでしょう。子供を喜ばす、ただそれを考えてもいいけないと思えます。不快を早目に忘れさせ、喜びを長い期間させる方法を考へてはどんなですか。無邪気ながらも彼等には敏感な頭脳がありますので、親は常に気をくばり忍耐強く教え、愛の力で教へ育てたいものです。

◎父の責任

前項は主に母親の事を書いたので、父であり、家長である責任を二、三、記して見たいと思ひます。

父親は家庭にしっかりとつかりした、徳行、根気、高潔、正直、忍耐、勇氣、勤勉、その外色々の面に美徳を要求されますが、そう言つた理想な百パーセントの家庭は到底実行出来兼ねますが、少なくとも、根気、正直、忍耐、勤勉それだけには必要だと思ふ。

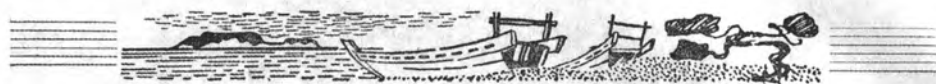
ユタサ、ワツサ(善悪)の道は如何なる人でも、その解釈は同一なるものと思ひます。自己満足の為め子供達に犠牲を強いている親をたま／＼見受けませんが、それは、その家庭だけの悲しみではなく社会全体の悲しみではないでし



ようか。われわれは社会を形成する一分子であるからにはその分子は各自の動きを正常にして始めて、立派な社会が出来るものと信じています。分子の故障あればそれが社会の故障と云つても決して過言ではないと思う。父は自我尊重にたらず、家庭を重じ、妻の手をささえ、賢明なる助言者として子供達の養育に当れば子供は父を信頼し、すく／＼と育ち行くでしょう。

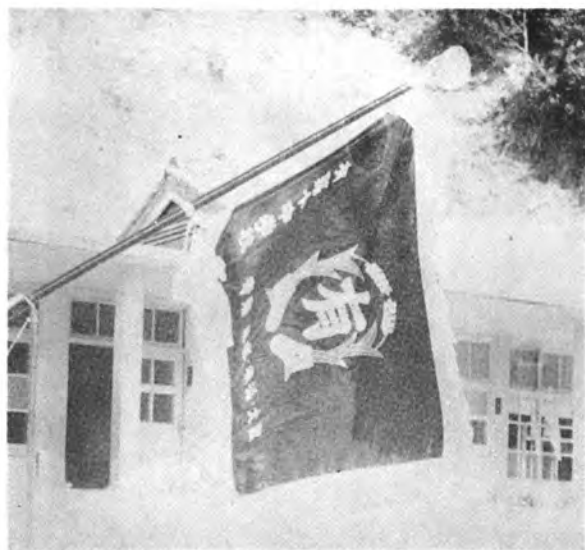
家庭の大統領である父よ、妻を愛し子供を愛し自我を捨て、愛情のある指導のもとに子供を育てたならば、どんなすばらしい貴方の子供、否、社会の子供が出来上り、どんな良い社会が出来上るでしょう。一日も早くその様な社会が来るのを大方の分子共は望んでいる事でしょう。もつと詳しく具体的に記すべきですが、紙面の都合でかいつまんで記した事をお詫びします。





目次

校章	1
校歌	1
まえがき	2
写真	7
記念式典	7
式次	11
祝詞	12
期成会長あいさつ	15
卒業生代表	16
記念事業	23
趣意書・事業計画	23
記念事業期成会役員	24
記念事業経過の概要	25
感謝状贈呈者芳名	25
学校沿革の概要	33
現職職員録	34
同窓生の思い出	35
編集後記	43



期成会実行委員並現職員



式辞をのべる宮城校長



感謝状を贈呈する
饒波期成会長



経過報告をする
玉城教頭



記念植樹



記念植樹をする
東区教育委員長

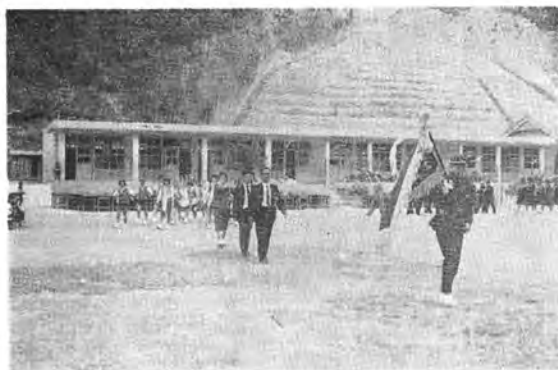


↑ 式典
→ とび入りする宮里教育長
寄贈されたピアノ ↓



創立70周年記念

パレード



美しくなつた花園

植樹でにぎわう
ひとこま



創
立
七
十
周
年
記
念
式
典

式典目次

式次第

- 1 開式のことば
 - 2 校歌斉唱
 - 3 経過報告
 - 4 感謝状並記念品贈呈
 - 5 学校長あいさつ
 - 6 東区教育委員長式辞
 - 7 祝辞
文教局長 教育長 立法院議員
 - 8 卒業生代表あいさつ
 - 9 祝電披露
 - 10 同窓生代表あいさつ
 - 11 閉式のことば
-
- 1 パレード(一時三〇分)
 - 2 祝賀式
 - 3 祝賀宴





式 辞

有銘小中学校長
宮 城 功 雄

本日は多数の御来賓の御臨席を得て、かくも盛大に本校創立七十周年記念祝典を挙げる事が出来ましたことは本校にとつて光栄この上もなく存ずる次第であります。ここに本校職員生徒を代表して厚く御礼を申し上げます。

本校の沿革をひもといて見ますと誠に感無量なものがあります。本校は遠く明治二十八年四月、有銘本部落（現島袋義助様方）部落事務所を借用し、児童二〇人余、教員の単級学校（天仁屋、有銘、慶佐次部落）を校区とする天銘尋常小学校として呱呱の声をあげ、今日丁度七十周年を迎える長い歴史を持つております。

明治三十年四月に現校舎敷地に移転し、大正十二年本村が久志村より東村として分離独立したため有銘尋常高等小学校と改称し今日にいたつて居ります。七十年の長い間には国家社会の情勢も数知れぬ変遷があり、学校はその怒濤を一つ一つのり越えて来たのであります。

その間、本村の発展、義務教育の年限の延長、ならびに就学児童が年々増加し、校舎もしばしば狹隘を告げ、校舎の増築と同時に運動場の拡張等が行なわれ、創立当時から見ますと全く面目を一新し、設備の点においても見るべきものがありました。しかし不幸にして第二次世界大戦は我が沖繩にも波及し、祖国の防波堤として六十萬県民あげての勇戦奮斗も其の甲斐なく平和の村、この有銘部落にも米国軍の爆弾の見舞うところとなり、学校、部落もろとも一瞬にして焼土と化し、一時途方にくれ、その前途を憂えたのであります。が、ひたむきな教育愛は頻死の状態に追いこまれた部落民を奮起させ、本校の伝統的美徳を生かし、学校永遠の発展に思いをはせ、和氣あいあい裏に学校再建に邁進させ、非常な労力と多額の経費をかけて学校建築に全身魂をかたむけて下さつた同窓生、PTAの皆様は私達の言葉で表現することの出来ない尊いものがあつたのであります。

お蔭で立派な校舎が出来、校地は戦前の五、六倍にもふくれあがつたのであります。皆様この偉業は本校教育に偉大な教訓となり、教育の推進力となるものと信ずるのであります。この絶大な御協力により教職員、生徒共に元気な再出発を行うことが出来、本校の発展が約束されたのであります。又過去七十周年の間には職員の変更もすくなくなくあつたのであります。が、いずれも熱誠以て児童教育に当られましたために開校以来何千名と送り出された卒業生の中には既に社会各方面に活躍して居ります有為の人材も数多く、遺憾なく本校の名声を発揚して居るのであります。



今や内容外観共に充実の一途をたどり、名実共に次代を担う世代を教育するにふさわしい学園が築かれつつあります。これは畢竟歴代の村、並びに区委員会、政府、各御当局の御援助の下に学校教職員の少なからざる御尽力と校区の御父兄は勿論、沖繩全島、遠くは日本本土、海外諸国で御活躍の御先輩皆様方の御理解によるものと、つつしんで満腔の謝意を謝げるものであります。

本日、本校の七十周年記念武典を挙げるに際し、本土在住者の皆様、校区外在住御先輩、地元御父兄諸賢の理解ある御協力の下に校旗の樹立、ピアノ、図書館、視聴覚教育備品の充実、校地プロック塀の構築、花園の拡張整備、区委員会の御協力による政府当局のプレゼントである校舎後方の砂防堤の構築等、実に学校が見違える様な明るい環境整備が出来ましたことは、此処に学ぶ生徒の幸福はさらに増加し、新しい民主教育の成果を見ることが出来る段階になりました。私達は、ここに思いを新たに、文化国家建設、郷土発展のために、次の時代の少国育成に全力を尽くし、校風のいやがうえなる発展に志し、以て各位の御期待に添う覚悟でございます。

重ねて御臨席の皆様にお礼を申し上げますと共に本日の意義ある記念式典に際して、七十周年間にわたって本校を育て上げ、今日あらしめた先輩諸賢に対し、厚く敬意を表し、又政府、教育委員会、村各御当局、PTA、其の他御援助に感謝申し上げます、一層の御指導と御鞭撻をお願い申し上げます、式辞と致します。

一九六六年二月二十六日





式 辞

東 区 教 育 委 員 会
 委 員 長 宮 里 松 次

本日ここに、琉球政府文教局長（代理）を始め、北部連合区教育委員会教育長、外関係多数の御参列の下に、本校七十周年の記念式典を挙行されるに当り、東区教育委員長として式辞を申し述べた機会を得ましたことを心から喜びとするところであります。

本校は、明治二八年四月、天銘尋常高等小学校として、呱呱の声をあげて以来、時代の流れ、教育制度の変遷とともに、その名もいろいろと移り変つて参りましたが、人間形成の殿堂として歩一步その地位を確立し、今日見るような名実共に立派な学校として、国民教育に貢献しておりますことは、これ偏に創立以来歴代の校長先生を始め、諸先生方の燃ゆるが如き教育愛と天職としての自己の責務を自覚され、子弟の教育に精魂を傾けてよい伝統を築いて来られた賜であり、ここにあらためて深く感謝申し上げます。一方父兄の皆様も教育優先の本義に徹せられ、自分達の不自由を顧みず、全面的に学校に協力して来られましたことに對しましても同様深く敬意を表する者であります。

本校のよき伝統と母校愛の中にはぐくまれた不屈の精神は、やがて本校をして幾多の人材を排出せしめ、各界に於いて大きく社会の進展に貢献している方々がおられますことは、本校の最も名誉とするところと思ひます。

現在の児童生徒君も、又先輩に優るとも劣まいと懸命に勉強しておられる姿は誠に末頼もしい限りであり、彼等は必ずや民生的で文化的な国家及び社会の建設者として、無限に世界の平和と人類の福祉に貢献するのであることは疑う余地もありません。戦後の沖繩の教育は、行財政の面において、又その内容、方法の面において本土と相当の較差を生じておりますことは遺憾であります。幸にして琉球政府文教局を始め、関係各機関及び団体の努力と本土政府の理解により、近年中にその較差を是正する方向に進もうとしておりますことは、御同慶に存する次第であります。本校がこの機会において益々その内容を充実し、学校本来の目的が充分に達成できることを期待するものであります。本日の式典並びに先刻御説明のありました記念事業の遂行に当り、遠く異郷の地にある本校出身者の尊い御奉仕を始めとし、本島内の有志の方々及び地元父兄の皆様、そして現職の諸先生方の並々ならぬ御努力に感謝し、本校育成に常に御指導と御助言を賜りました文教局並びに北部連合区教育委員会に對し厚く御礼を申し上げます、私の式辞といたします。

一九六五年二月二六日



祝 辞

文 教 局 長 赤 嶺 義 信

本日、有銘小中学校創立七〇周年記念式典を挙行されるに当り、来賓及び卒業生並びに父兄、児童の皆様多数お集りの席においてお祝いの言葉を申し上げることは、私のよろこびとするところであります。

御校は明治二八年四月、天銘尋常小学校として創立され、沖繩における普通教育を施す学校として、今日まで教育の灯をともしつづけてこられたのであります。

思えば創立当初より名実共に優秀な学校として、幾多の人材を輩出し、広く海外を始め県外、郷土におきまして、あらゆる部門に活躍発展しておられることは、まことに力強いことで、よろこびにたえないところであります。

おもうに本校の長い歴史と伝統は郷土東村の輝かしい発展を象徴するものでありまして、本校の教育の成果は、今日の北部の繁栄の母胎ともいうことができましょう。

一世紀に近い長い歴史を経た本校の成長のあゆみには、幾多の苦難風雪があつたことと思われまふ。その間、校名の変更、たび重なる教育内容や組織のうつりかわり、また社会の変動などにより教育上の支障もかなり大きなものがあつたのであります。それにもかかわらず、立派な人間の育成という教育の原理と父兄皆様の母校に対する愛情は少しも衰えずに続いて来たものと思ひます。とくに今次大戦においては、施設設備は灰じんに帰し、本校の歴史の上で最大のいたでを受けたのであります。さいわいにもPTAは勿論、教育委員並びに村御当局や先輩各位の涙ぐましい努力によつて施設設備の充実を図り、学習指導や生活指導に努め、内容外観ともにすばらしく発展されましたことを思うとき感無量で、皆様のご苦労に深く感謝と敬意を表するものであります。

児童の皆さん、今日の東村の繁栄を築き、今日の東村を担っているのは大多数がこの学校を卒業された皆さんの先輩であります。そしていつも皆さんの勉強ぶりを見守り温かい援助の手をさしのべ、皆さんの進む道しるべとなつているのであります。美しい皆さんの学校は七〇年の長い歴史をもつた名譽ある学校ですから、先輩ののこした立派なしごとをしのび、新しい郷土づくりに努力して下さい。そして健康な体、美しい心、朗らかな強い心でよりよい学校にすることは、皆さんのつとめでありますので、誇と勇氣をもつて一生懸命勉強して下さい。

今日の創立七〇周年を記念して、プロツク壁の建設、運動場の整備、ピアノ購入、鼓笛隊の結成をなされ、さらに学校の象徴たる校旗を樹立されましたことはまことに意義深いことで、長く記念としてのこることでありましよう。



祝 辞

文 教 局 長 赤 嶺 義 信

本日、有銘小中学校創立七〇周年記念式典を挙行されるに当り、来賓及び卒業生並びに父兄、児童の皆様多数お集りの席においてお祝いの言葉を申し上げることは、私のよろこびとするところであります。

御校は明治二八年四月、天銘尋常小学校として創立され、沖繩における普通教育を施す学校として、今日まで教育の灯をともしつづけてこられたのであります。

思えば創立当初より名実共に優秀な学校として、幾多の人材を輩出し、広く海外を始め県外、郷土におきまして、あらゆる部門に活躍発展しておられることは、まことに力強いことで、よろこびにたえないところであります。

おもうに本校の長い歴史と伝統は郷土東村の輝かしい発展を象徴するものでありまして、本校の教育の成果は、今日の北部の繁栄の母胎ともいうことができましよう。

一世紀に近い長い歴史を経た本校の成長のあゆみには、幾多の苦難風雪があつたことと思われまふ。その間、校名の変更、たび重なる教育内容や組織のうつりかわり、また社会の変動などにより教育上の支障もかなり大きなものがあつたのであります。それにもかかわらず、立派な人間の育成という教育の原理と父兄皆様の母校に対する愛情は少しも変らずに続いて来たものと思ひます。とくに今次大戦においては、施設設備は灰じんに帰し、本校の歴史の上で最大のいたでを受けたのであります。さいわいにもPTAは勿論、教育委員並びに村御当局や先輩各位の涙ぐましい努力によつて施設設備の充実を図り、学習指導や生活指導に努め、内容外観ともにすばらしく発展されましたことを思うとき感無量で、皆様のご労苦に深く感謝と敬意を表するものであります。

児童の皆さん、今日の東村の繁栄を築き、今日の東村を担つてゐるのは大多数がこの学校を卒業された皆さんの先輩であります。そしていつも皆さんの勉強ぶりを見守り温かい援助の手をさしのべ、皆さんの進む道しるべとなつてゐるのであります。美しい皆さんの学校は七〇年の長い歴史をもつた名誉ある学校ですから、先輩ののこした立派なしごとをしのび、新しい郷土づくりに努力して下さい。そして健康な体、美しい心、明らかな強い心でよりよい学校にすることは、皆さんのつとめでありますので、誇りと勇気をもつて一生懸命勉強して下さい。

今日の創立七〇周年を記念して、ブロック壁の建設、運動場の整備、ピアノ購入、鼓笛隊の結成をなされ、さらに学校の象徴たる校旗を樹立されましたことはまことに意義深いことで、長く記念としてのこることでありましよう。



これらの事業に対し期成会を中心に教育委員会を始め、先輩や学区の皆様の御努力と御熱意により、その実現をいたしましたことに深く敬意を表する次第であります。

創立七〇周年の輝かしい歴史と榮ある伝統を回顧されまして、今後ますます向上発展の決意を新にして、御精進ご努力あらんことをお願いし、先生方や児童生徒並びにPTAの皆様の御健闘と校運の限りない隆昌を祈念いたしましてお祝いのごとばいたします。

祝 辞

北部連合区 教育長

宮 里 武 英

本日、ここに有銘小中学校創立七十周年記念式典を挙行いたしますにあたり、お祝いを申しあげる機会を与えられましたことはまことに光栄であり、喜びとするところであります。

本校は創立されて、ここに七十年という長い歴史を重ねられ、明治、大正、昭和と大きく変貌する社会情勢の中にあつて義務教育への影響もまた大きなものがあつたことと思ひますが、人格完成をめざす崇高なる教育理念と父兄皆様の学校に対する愛情は少しも変わらず今日まで続いてきたのであります。

とくに今次大戦においては、えいえいとして築きあげた施設備品が灰じんに帰し、本校の歴史のうえで最大のいたでをこうむつたのであります。村当局をはじめ教育委員、PTAの皆様の涙ぐましい努力によつて、このように再建され、本日七十周年を迎えて、今なお校運が発展の一途をたどつていることを思います時、まことにご同慶にたえず、ここに皆様方のこれまでのご労苦に対し、深く感謝と敬意を表するものであります。

このように本校は七十年の教育の成果を土台にその運営は軌道にのり、子どもたちは一段と近代化され、諸施設の中で毎日の学校生活を楽しみ、心身ともにすくすくと育ちつつありますが、しかし時代は電子、原子、宇宙という科学的すぎましい大躍進時代をむかえています。このような日進月歩の社会に処しておくれをとらない教育に対処するために常によりよい教育計画の樹立とそれを実践するための諸施設の拡充、整備が望まれるわけでありませう。

幸い本校はこの新時代に対処してこの創立七十周年の記念式典を計画、その事業として学校図書館の充実、ピアノの購入、花園、プロツクべいの整備など校区をあげて、よりよい環境づくりにはげんでおられるようで、子どもたち



の幸のためにまことに喜びにたえません。「教育に投入する資本は不減なり」といわれていますが、皆さんのこうした物心両面からの学校への協力は子どもたちの血となり、肉となつてやがてまた地域社会の発展となつて還元されるものと信じます。どうぞ今日の七十周年の式典をまた一つの足場として学校と地域社会が共通の目標のもとに相たずさえて、ご精進くださいまして、この輝かしい学校の歴史にさらに光彩と意義を添えてくださいませう、皆さんの健康と学校のいやさかを祈つて祝辞といたします。

祝 辞

琉球政府立法院議員

国 場 幸 昌

有銘校が開校七十周年を迎えるに当り心からお祝い申し上げます。

七十周年と申しますと明治二十八年に当りますが、当時の沖縄の社会状態を考えました場合、本校開校の意義は大きいものがあります。とりわけ山村のへき地に本校を創出なされた先達の血のにじむ努力を忘れることは出来ないであります。先達の心血を注ぐ教育に対する熱意と愛情に支えられて発展した本校の歴史そのものが、教育の精神を体現するものであります。本校は文化的恩恵にほど遠い地理的位置にありますが、このような地理的悪条件を克服し今日のようなすばらしい学校を築きあげたことは、ひとえに、当校区のみなさま方の教育に対する熱意の賜物であり深く敬意を表するものであります。

申しあげるまでもなく教育は社会発展の原動力であります。特に物質資源に乏しい沖縄の将来は、人間の能力の開発、優秀な人材の育成にかかつており、教育の使命は重大であります。したがって政府が教育を最も重要な事業として多くの予算を投入するのは当然であります。しかしながら、いまだにへき地の背負う苦痛は解消されないうままです。教育の機会均等を図り、地域較差を是正することは最も切実な要求であります。一日も早く学校施設を完備し教材の充実による教育効果を最大限に発揚しうる教育環境を作ることが緊急の課題であります。

今後、小生も当地区選出議員として、学校当局を初め村当局と協力し、この課題ととりくむつもりであります。本校が七十周年記念を契機として今後ますます発展するよう祈りお祝いの言葉といたします。



卒業生総代祝辞

名護町比嘉病院長

比嘉 松栄

本日は、母校の七十周年記念式典に、やつと出席する事が出来ました事を此の上もない喜びと感激に堪えない次第で御座居ます。自分が在学時代と云えば、五十年余前でありませう。現在の母校の校舎や学園を見ていますと、何とも云えぬ懐旧の感激と、ある淋しさを感じるのであります。当時の学校は東側の校庭に三つ、中庭に一つ、校門の右側に一つの大きな梯梧の古木があつて、四季毎の真赤に咲き誇る花は実に見事でした。気持のせいか、現在の学校よりも大きかつた様な気がします。

当時天銘校と云われていて、天仁屋、有津からも通学していた時代であります。私が六年生の時、高等科が設置された当時で、それまでは、久志村瀬嵩高等科がありました。五十年余と云いまして未だ二、三ヶ年か、四、五年の様な気がして思い出が次から次へと走馬燈の様に浮んで参ります。女の子を泣かして罰せられた事、新らしく高良利信校長をお迎えしての朝会で鼻の高い先生のお話しを聞いている時、全校生徒がくすくす笑い出したので堪らなくなり、自分も笑つて罰せられた事、運動会に転んで膝をすりむいて泣いた事、この創痕は今でも尚残つています。

放課後、大きな梯梧の陰にかくれて、女生徒に悪口を云つて喜び知れないと思うなら、これがわかり教室で立たされ机を持たされて罰せられた時、先生が黒板に字を書いている隙に机をそつと置いて逃げ出した事や、又時に、有銘、天仁屋、慶佐次と組分けして、海岸で相撲をとつて遊んだ。その時、下級生がチンポを切つて、宜野座医師の所へ伴れて行つてチンポを縫つて貰つたこと等、思い出せば次から次へと浮んで来ます。当時の恩師も現在生き残つておられる方も少なく、同級生の生き残つているのを数えて見ても五、六名と云う少ない数になつています。

思えば淋しい思いで一杯です。戦争で母校も同じく微塵に吹飛ばされて、見る陰も跡形もない。その中に父兄や教師が一致協力して仮小屋教室を作り、次第に政府の援助により、又区教育委員会によつて、校舎は復興し、次第に備品も備え付けられ、終戦後、母校がかくも生まれ変わり、今日の立派な校舎と校庭が出来上つたのを見て、嬉しく、立派な教育環境を築き上げて下さつた先生方やPTAの皆様に敬意を表すると共に、感激の気持ちで一杯であります。

「国敗れて、山河あり」と云えども、母校は依然として、立派に復興し昔日を思い比べて感慨無量に堪えませぬ。七十年の歴史と云えども、その間には色々の変転があり変化があるのは当然ですが、吾が母校は相変わらず吾等同窓生



を見守り可愛いがつて下さる、そして昔と同じ気持ちでわれわれを迎えて下さるかと思えば、ほんとに懐しいばかりでなくわれわれの誇りであります。私は、本校を卒業したと云う誇りを持ちたいと思います。

本日七十周年を迎え、誠に感慨無量に堪えないのであります。私は最初に、やつと出席出来たと申し上げましたが一昨日、教頭先生が、わざわざお出で下さった時、又島袋徳盛先生からは是非出席する様に申された時、多分当日出席出来ないかも知れないと申し上げた次第です。と申し上げる理由は、本日は四つの重要行事にぶつかつてゐる。全島PTA研究会が名護町北部会館であり、午前九時から午後五時迄一日中である。私も終戦直後から名護地区PTA会長、全島PTA副会長を十年程もやつていたので、出席しないと相済まない。もう一つは名護高校の校長と定時制主事の歓送迎会が午後五時からあり、それも出席せねばならない。もう一つは午後六時から、琉大主催の茅東大学長一行の歓迎、一つは母校の七十周年式典である。どちらも出ねばならない会合である。

どの様に時間の繰り合わせしても、不可能な事で「一人の婿に四人の嫁」でどうするべきか、迷つていたのであります。何と云うても母校を忘れることには行かず、他の方は、申しわけをして参つたのであります。ここに故郷の皆様、同窓の皆様にお会いできまして、何とも云えぬ喜びで一杯であります。心から皆様に敬意を表し、お礼を申し上げると共に御同慶に堪えません。

私は、終戦後より今日まで一貫した信念を持ち続けてゐる積りであります。「教育こそ、総てに優先する政治、経済、社会も文化も将来の教育なくては何も出来ない」と云う信念であります。一国の興隆も、消滅も、教育にかかつてゐる事は歴史上明らかであり、一県、一町村に於いても、その復興、発展は教育の力であると私は信じ、教育の為に微力を尽してゐるのであります。人は私に教育気狂いと云う人もいます。私は中央教育委員四ヶ年、名護地区PTA会長、全島のPTA副会長十年も続け、名護町教育委員を十二ヶ年、琉大理事を七ヶ年になり、現在理事長として沖縄教育に関係して参りました。今後色々な面で教育に尽して行きたいと考えています。

終戦後の沖縄に於ける特殊事情は、教育の面に於いても、色々困難な事が多いのであります。日本人としての教育をするにしても、多くの矛盾があります。一步教育を誤ると沖縄の将来は、どうなることでしょうか。戦後二十一年間に於ける沖縄の教育は日本本土より遅れてゐると云われてはいますが、その較差は年々深くなるばかりであります。昨年七月、教育費国庫負担要請の陳情団代表十二団体の代表に加わり、日本政府と接渉をして参りましたが、日本政府並びに国会方面の御理解と援助による、教育の較差是正は漸く実現の運びに致りました。これから日本の県並の教育に近い将来必ず出来ることを私は確信しています。昨日も、沖縄少年会館の落成式がありました。日本援助による青年の家が名護城址の後方に今月着工しています。沖縄の教育の将来は明るい見通しであります。



とうか七十周年を契機として、母校の益々発展する様、心から祈つてやみません。諸先生方を中心にPTAの皆様村当局が一体となつて、益々強化せられる様、祈念するものであります。終りに一言御礼を申し上げます。

本日のこの式典に当り、小生に感謝状を下さつたのでありますが、恥入つている次第であります。平素何等母校に尽し得ず、只当り前の事をして感謝状とは申し訳ないのであります。君は母校の為協力が足らないから、今後は心を入れかえて協力せよ」との励ましの意味に解釈しまして受取りたいと思ひます。今後必ず、何なりと出来るだけの事は、やりたいと決心するものであります。誠に有難う御座居ました。

本日は何等準備もせず、突然のこととして、何を申し上げたか知りません。甚だ簡単ではありますが、同窓生の一人として、お祝いの言葉と致します。



記

念

事

業

趣意書

明治二八年四月、母校が天銘尋常小学校として呱呱の声をあげてから学制の改革により校名の変更を見ながら有銘小中学校と命名され、その間こん日まで既に七〇年の歳月を経ようとしております。昭和四一年（一九六六年）四月に創立七〇周年を迎えるわけでありませぬ。

思えば創立当初より名実共に優秀な母校として幾多の人材を輩出し、広く海外を始め県外、郷土におきましてもあらゆる部門に活躍発展していることは、この上もないよるこびと力強さを感じるのであります。然るに第二次大戦は、その終えんの地として郷土を惨憺たる姿にし、母校も一朝にして校舎諸共一切の施設備品を焼失したのであります。しかし乍ら、子弟の教育は一刻の休止も許されませぬ。灰燼の中から皆様方の教育愛に支えられ、新制の母校に生まれかわつたのであります。校舎も建てられ、施設備品も逐次整い、今日に至りました。

今を去る十年前即ち一九五六年（昭和三〇年）には政府財政も苦しく、校舎も六六%の建築をみましたが、尚馬小屋校舎で学習を続ける状態でありました。そこでせめて子供達に読書の喜びを与え、日頃の学習に役立てようと思いつた決断をもちまして近代鉄筋コンクリート六〇周年記念図書館を建設したのであります。これはひとえに皆様の母校愛の賜物と衷心感謝申し上げます。

あれから十年、直接に政府、教育委員会、PTA、諸関係機関の援助のもとに教育効果をあげてきましたが、近代社会の教

育をすすめるためには施設備品の充実は尚程遠い現状といわれはなりません。

創立以来物心両面にわたり絶大な御援助をいただき乍ら再びここに七〇周年記念事業を計画することを心苦しく思いますが左記の通り母校の発展と子供達のため記念事業を推進するものであります。

何卒期成会の計画する記念事業を最も意義ある事業と思召して御賛同下され、御協力と御援助を懇願申し上げます。

殿

創立70周年記念事業期成会



七〇周年記念事業計画

一、	旗	壁	三〇〇
二、	入	突	六〇〇
三、	備	隊	二〇〇
四、	充	整	五〇〇
五、	館	場	五〇〇
六、	調	律	二〇〇
七、	ピ	ア	二〇〇
八、	念	典	〇〇〇
九、	誌	式	〇〇〇
計			三、〇一〇

学
校
沿
革
の
大
要

沿革の概要

A 戦前の概要

年月日

記

事

明治二八・四

天銘尋常小学校創立

三〇・四

現在の敷地へ移転

三八・四

六年制となる

大正一二・四

久志村より東村として分村、有銘尋常高等小学校と改称

昭和一六・四

有銘国民学校と改称

二〇・三

沖繩戦にて全焼

B 戦後の概要

一九四五・十

現在敷地に仮校舎を建設し、有銘初等学校と称して発足、校長事務取扱、新里義雄氏校長 宮城盛吉氏任命さる

四七・四

新学制六、三、三の実施により初等学校、中等学校として分離独立し、初等学校、中等学校併置校となる

四八・四

校長宮城盛吉氏、名護英語訓練主事へ転任 教官島袋徳盛氏校長事務取扱となる

四九・二

有銘小中学校と改称

四九・七

校長上原亀吉氏、地区指導主事に任命され 宮城政忠氏校長に任命さる

五一・九

校舎石造り、本建築二教室落成(東側教室)

五一・九

職員便所完成(一、五坪)

五二・四

校舎鉄筋コンクリート造二教室(A型)落成

五二・十

校舎鉄筋コンクリート造二教室(A型)落成

五三・七

校歌制定、作曲 渡久地政一氏

五四・七

校歌制定、作曲 渡久地政一氏

五五・七

校歌制定、作曲 渡久地政一氏

五六・一

校歌制定、作曲 渡久地政一氏

五六・一

校歌制定、作曲 渡久地政一氏

一九五六・二・九

六拾周年記念図書館竣工

五六・二・二六

六拾周年記念式典挙行

五六・六・五

校舎石造り二教室落成

五七・四・一

校長、宮城政忠氏、津波小中学校長へ転任 全日、古堅宗徳氏校長へ任命さる

五七・十・一九

運動場東南、西側一部拡張

五七・十二・二七

調理室、物置、機電室、十六坪建設竣工

五八・七・二一

五三年度、建築ブロック瓦葺平屋二教室修繕(委員会)

五九・八・三一

校門竣工「堀川泰吉氏寄贈」

九・一

低鉄棒設置「自力」

九・二

便所「ブロックスラブ」八坪竣工

十・二七

はん登棒設置(自力)

十一・七

混成器設置(政補自力)

六〇・四・九

肋木設置(自力)

五〇・十

排水溝竣工(自力)

五二・四

塵芥焼場設置(自力)

六三・十

文教局指定保健体育実験学校発表会

六一・四・一

学級数小校六、中校三

六二・四・四

校長古堅宗徳氏、安田小中学校へ転任

四・六

宮城功雄氏校長へ任命さる

四・七

校舎建築基礎工事配金検査

六・二九

水道工事完成

七・六

新校舎落成

六三・一・二六

沖繩教職員会主催教研集会において、六年生保健体育公開授業に参加

六・二五

辺土名高等学校主催球技大会に於いて、男子バレー優勝

八・一一

地区代表として、中体連主催全島中学校バレー大会に参加

十・一七

主席部落訪問並学校訪問講話

PTA副会長	PTA会長	給仕	〃	〃	〃	〃	〃	〃	教諭	書記	〃	〃	教諭	教頭	校長	職名	
新里	平田	饒波	宮城	石川	太田	玉城	平良	安里	上原	翁長	平田	吉川	島袋	真柴	玉城	宮城	氏名
吉雄	吉行	正子	洋清	元美	明子	和子	幸子	清米	清子	ナ	孝子	節子	義久	徳仁	武功	担任学級	
				小五年	小四年	小二年	小三年	小六年	小一年			中二年	中一年	中三年		出身地	
〃	〃	東村	大宜味村	東村	宜野座村	今婦仁村	東村	国頭村	国頭村	東村	東村	竹富町	大宜味村	東村	今婦仁村	国頭村	

現 職 員 一 九 六 五 年 度

- 一九六四・一・二〇 早大総長大浜信泉先生、琉石試験地視察の帰途来校講話
- 九・九 東京オリンピック聖火リレー参加
- 六五・二・二五 創立七十周年記念行事準備委員会開催
- 三・二二 仲嶺真寿氏、校旗、ピアノ寄贈
- 六六・二・二六 創立七十周年記念式典挙行

同窓生の思い出

十一年間の思い出

東江小学校教諭 大城 博

創立七十周年おめでとうございます。

記念誌の原稿を依頼され、何をどう書こうかとまよつてしまいました。ふと頭に浮かんだのは、私が母校に勤めた約十一年間（一九五一年～六二年）の主な行事を中心とした思い出をづつてみることに致します。

一、地区 珠算 競技会に優勝

一九五一年に地区珠算競技会に優勝する。当時地区教職員会の主催によつて地区内の学校対抗の珠算競技会が催されていたわけですが、各学校から五人ずつの選手によつて、その競技会が開かれた。

当時の校長上原亀吉先生は、それにとでも理解があり、熱心で全職員にハツパをかけ、珠算の指導にあたらせたのでありますが、当時といえば物もあまりなく、そろばんがそう簡単に手にはいるものではありませんでした。そこで私が校長命令により那覇までわざわざ、そろばんの買い出しに行つたわけでありました。その時のエピソードを一つ御紹介しよう。

そろばんの買い出しの帰りに、名護でシグナル（スタート合図に使うピストル）を買つてそのまゝズボンの後のポケットにつまみ、バスに乗り、源河まで、当時は有銘までのバスもなく源河から一人でトボく、と山道を越さなければならぬ。

源河でバスを降りると、日はもう西の空にかたむきかけていた。源河の部落を急ぎ足で山道へと向つたのであるが、村人は

私のズボンのアツソウな物に目がついたようで、翌日はいつもと変らない授業をしていたところ、昼過ぎの授業中、突然警官（源河の駐在）に呼び出されて色々と訊問、どうやら昨日の後ポケットの物が強盗にまちがわれたらしい。

しかし、真実を知つた警官は啞然としてしまつた。違ひ所本當に御苦労様でしたとも言わなければこちらの気持ちがおさまらない。

このようなことがあつて那覇から買つて来たそろばんを生徒は喜んで使い、そして、それで指導したら、その時の地区大会では見事総合優勝をなし、私の苦労のしがいがあつたものだと思います、喜びでいっぱいでありました。

二、創立六十周年記念

当時の学校長宮城政忠氏、PTA会長翁長良源氏お二人を中心とした校区内の有志の方々によつて、六十周年の記念行事企画委員会が設立され、運動が開始されたのでありますが、委員の方々はその計画や趣旨の徹底をはかるため、日夜校区内の部落懇談会をはじめ、遠くは那覇在住の校区出身者との懇談会や地域別に何十回となく懇談会をもち続けたのであります。

本當に当時の委員の各位には頭がさがるばかりでありました。おかげ様で南米をはじめ日本々土、校区外、校区内からの寄附金が当時金（B円）で三十余万円という大金が集まり、見事な記念図書館ができました。

尚校区内においては、金銭の寄附ばかりではなく、PTA会員による労働の提供などとその働きは実にすばらしいものでありました。それは、子供を愛する親の気持ちばかりではなく、母校を愛するみなさんの気持ち、みんなで立派な学校を作り

そして、社会に役立つ立派な子供を、そして、後輩を育てていくという教育に対する関心の深さとして作りあげられたものと思います。それはとりもなおさず父兄をはじめ、校区出身の一人ひとりの教育を愛する「愛の結晶」であり「魂」として、いつまでも記念に残る図書館でありましょう。

三、地区陸上競技大会優勝

これまでも有銘校は、地区の競技会において、毎年種目毎においては多くの優勝者を出してきて、地区の記録保持者も数多く出していたのでありますが、総合では大きな学校におさえられ二位か三位となり、優勝はできませんでしたが、一九五八年度の地区大会には、五二点をとり二位の三四点を大きく引きはなして見事優勝をかち得たわけでありました。

当時の六年生の在籍わずか十二名であつたことから、優勝は本当に不思議でありました。尚当時の校長古堅宗徳先生はじめ教頭の大城親喜先生もスポーツに理解があり、熱心であつたわけですが、特に大城教頭をはじめとして、全職員が運動服で選手の指導にあたられたことが優勝までこぎつけた大きな原因でありました。なお、学校では優勝と聞き、それを知つた多くの父兄が集まり、選手の帰りを待つて優勝祝いを盛大に行なつたのでありますが、よく日は全校区あげての部落から部落への優勝パレードと実にすばらしかつたことが、今もありくくとの目の前に浮かんでくるのであります。

当時の選手を紹介しましょう。

男子 崎山良邦 宮城正則 寄川克己 比嘉等 親川長栄
女子 稲福良子 伊佐末子 屋富祖弓子 比嘉秋子

四、第九次教研中央集会で実技発表会

一九六二年度の教研中央集会に辺土名地区から推薦され、六年生が中央で器械運動の発表会をすることになりましたが、参加は那覇が中心で地方からの参加は有銘校だけなので、推薦者の地区にも中央にも派遣費はなく学校としては困つてしまつたのだが、今度の機会を逸すると二度と中央で有銘健児の意気をしめす時はないといふので、宮城功雄校長は先頭にたたれ、全職員が夜おそくまで校区内の各戸をまわり、募金をしたところ全父兄が大変喜び賛同なされ、多くの金が集まり、いよ／＼中央での機会を得たわけでありましたが、更に那覇在住の先輩各位から多額の寄附をいたゞき、子供達は勿論、全職員が感激でいっぱいでありました。

子供達は、はじめて見る運動場のような家（琉大体育館）にびつくりすると同時に発表の日をまちわびたのであります。当時の様子を全琉各地区から集まつた先生方のまとめの一部を御紹介して子供達のすばらしかつたことを思い出してみたいと思います。

「まとめ」

琉大体育館に各地区から馳せ参じた会員が、一階、二階で今か今かと待つてゐる。ベルが鳴ると、児童より会員の方がソワ／＼しだした。いざ活動がはじまると「実に柔らかない体をしてるね」とか「すばらしい」とかの声があちこちから耳に入る。

―中略―

そこでマツト運動の「とび込み前転」である。男子が補助台になり、その上を女子がとび込みをするわけだ。補助が悪ければ手を教え合い、注意し合い、女子が失敗して男子の上につ

思 い 出

有銘校教諭 翁 長 ナ へ

かつては平気だ。又次の「背支持前転」もしかりで、男の子と女の子の協力が目立つ。一方、とび箱に目をやると、そこでも男女の差別なく行なわれている。手をとって教え合い、助け合う姿は実にうらやましく、參觀者もつい引きづられて邪魔になるくらいだ。そればかりでない、技能の素晴らしさ「開脚とび感し」の例をとつてみよう。

とび箱から踏切板の距離を色々かえ、とび箱の前方へ一米くらいいもとんでいく技は、中学二年生ぐらいであろう。一人残らずみなできる。六年生とは思われない。いや中学校の体操クラブを思わせるような技能である。あまりのすばらしさに時間を忘れ、気がついた時には、いつの間にか終りに近づく、

「後略」というようなまとめになつていて、当時の六年生には一生の思い出となることであろう。

以上十一年の間に四名の校長につかえて、その時の特に印象に残つたこと、一つづつあげて思い出と致しましたが、その他にも色々あつたわけです。特に古堅校長の時は、文教局指定の実研学校の発表会もあつたわけですが、紙面のつごうで省略させていただいて、有銘校の限りない発展を祈りつつ筆をおきます。

大正三年四月六日、天銘尋常小学校一年入学、今十一年三月高等科卒業、五昔も前のことで、おぼろげな記憶をたどりながら、特に印象に残っている事柄だけを二、三書いて見度いと思ひます。

入学当初、琉球紉の着物に紺の帯を前で結び、髪も琉球まげにアルミのかんざしをさし、風呂敷に包んだ本を帯のように腰にしぼりつけ、筆箱をガラン、ガラン音をさせて歩くのが、とても嬉しかった。現在の子供達の姿から見ても、あの頃は衣食住総べての面で原始的な歴史の一面である。

校舎は改築中だつたので、民家で授業を受けた。やがて障子のある暖い本校舎に移つた。或る日、チコクして障子の外から「ごめんください、チコクしましたからはいらせて下さい」と云う、あいさつの言葉が云えないで寒さにふるえながら一時間の授業が終るまで、縁側に立つたこともありました。

カギ型校舎で、カギのたての面は、左端から校長住宅、御真影室、二年生、一年生、職員室、五、六年、中廊下をへだててカギの横側が、三、四年で僅か四教室の学校でした。

運動場には、よわい三百年を越すと云われた、梯梧の老木が五本もあつて、四月になると真紅な花が満開し、見る人を驚嘆させ、散る頃は、運動場一ぱい赤い毛布を敷きつためよんで、実に壯観でした。朝早く登校して落ちたばかりの花弁を拾つて糸にぬきつらわて首かざりにして喜んだものです。

この梯梧は、わが校のほこりでした。有銘校と云えば梯梧、梯梧と云えば有銘校を思い出す位、有名でしたが、この尊い文化財も戦争の犠牲になつてしまいました。

羨の面はきびしかつた。師に対する態度、言葉使い、あいさつ等徹底していた。先生の前を通る時は、かがんで通り、先生の姿を見ると、いつでも、どこでも、あいさつし、学校では、殆んど方言は聞かれなかつた。若し方言でもしようものなら、たちまち週番に見つけられ、大きな方言札が渡された。

行事では、天長節が最も大々的で、老も若きも校区民を挙げてのお祝でした。儀式がすんでから、三ヶ字の余興が始まつた。有銘はエイサー、慶佐次は棒術、天仁屋は踊り、学校は生徒の遊び、ダンス、空手など盛大くさんのプログラムの順を追つて朝の十時から、夕暮れまでも続いた。天仁屋の踊の行列のビララーのにぎやかな楽の音がまだ脳裏に残つてゐる。

教科では、読方の「ハオリ、ハカマ」唱歌の「モモタロサンモモタロサン」がなつかしく思い出されます。

なつかしい師のおもかけを追つて、一年生の吉元朝信先生のきびしい躰け、二年生の竹下せき先生や大山岩蔵先生のユーモアに富んだ教授法、書道のうまかつた友利先生、学習指導の上手だつた宮城盛吉先生、祝嶺先生のきびしい中にも慈愛に満ちた教育熱に燃えた指導法はやがて天才児を作られた。そして、その教え見達からは慈父のようにしたわれた。

以上をもつて簡単に思い出の一端をのべます。

吾が思い出

名護英語学校長 宮 城 盛 吉

私が本校の旧名である天銘尋常小学校（この校名は大正十二年の分村以後現在のそれに改称された。）一年級に入学したのは、今から丁度六十二年前の明治三十八年四月であつた。

時恰も日露戦役の末期で、わが日本軍が破竹の勢を以て、奉天大会戦に於て、強大な露軍を撃破し、之を満州国境へ敗走させたのは、その先月、翌五月には、わが連合艦隊が遠征のバルチック艦隊を日本海に迎え撃ち壊滅させ、日本の勝利を決定的ならしめ、日本が一躍世界列強の間に伍するに至つた軍國華やかな頃であつた。されば日本の津々浦々を風靡した戦勝ムードは、ここ沖縄にも溢れ、一年坊主のわれわれも上級生と一緒になつて、軍歌戦友「ここはみ国の何百里……」や従軍看護婦「筒砲の響遠ざかる……」を声高らかに歌つて歩いた印象深い年である。

戦捷により、日本は一等国に列せられたとは言え、遠く本土を離れた沖縄の僻地にあるわが校は、如何と云うに当時の山村の小学校の例に洩れず、生徒の服装は筒袖の着物に靴も草履もなく、跣で通学した。袴を着けるのは、学校や公の重要行事の場合に限られていた。洋服は、誰も持たなかつた。学校用具に靴はなく、風呂敷に包み腰に巻いて持ち歩いた。弁当箱は無く手拭に包むか、小さい竹籠に入れ、ぶらさげて歩いた。中味はふかしいもか焼いもを二、三個、白いご飯は節日の学校のある場合に限られていた。

校舎は、木造本建築が一陳あつたが、暫くは字事務所で授業を受けるクラスもあつた。われわれ一年生は、グラウンドに建てられた堀立仮教室で暫く勉強したのを覚えてゐる。

本建築校舎の北端は、校長住宅と職員室に充てられ、普通教室が三つあつた。グラウンドも現在の三分の二位の広さはあつたらうか。校門前の道路と本部落の中央通りとは、少しのカーブで連結され、門前道路の向側には民家が一行に並んでいた。

併しこのグラウンドには、他校ではめつたに無い、樹齢二百年位のデイゴの巨木が三本、空を蔽う様に立つてゐた。毎年五、六月の花の季節が訪れると、グラウンド上空一杯ひろがつた枝々の梢々には、美しい真赤な花が咲きそろつて、われわれの目をどんなにか楽しませたことだらう。

夏になると涼気溢れる、その樹影で愉快に遊び、運動し、全く暑さを忘れた。或時は、生徒数名が手をつないでやつとだきかかえられるコブだらけの樹根をよち登つたり、下りたり、ブランコを枝に吊して乗つたりで、これらの老樹こそは、われわれ生徒にとつて、かけがえのない友であつた。しかるに去つた戦火に校舎が全焼した時、これらの老樹も痛めつけられ、かてゝ加えて老齡の故に戦後間もなく杉の木と共に枯死して、ありし日の姿は永久に消えてしまつた。

私達の同級生のうち、男子では慶佐次の古堅盛吉、与那嶺太郎、有銘の仲嶺真助、島袋義助、新垣善徳、寄川孝和、平田嗣吉、天仁屋の石原昌和、比嘉貞治、徳村政雄の諸君が居た。

下級には、慶佐次の知念松助、有銘の翁長良源、平良辰光、天仁屋の石原昌直の諸君が居た。担任の先生は、一年生の時は、最初は玉城定栄先生、その次は吉元長整先生であつた。吉元先

生は、名護にあつた北部地区唯一の高等小学校を卒業され、其の後独学で教員の免状を得られた諸事几張面で、ちよつとこわい感じのする少壮青年教師であられた。永年の教職を辞された後に久志村長に栄進されたが、間もなく病を得て、勇闘空しく他界された。

加根村先生と言う紅一点の女教員が居られたが、この先生から上級になつた時音楽を教はつた。われわれが四年の卒業証書を戴いた年に学制改正で六年制になつたので、われわれはそのまま、五年生に進級した。すると一年、二年の先輩が編入生として、このクラスにはいつた人が、可なりあつた。

有銘の真栄城徳行、城間盛吉、崎山喜良等の諸君が、その中に居た。五年生の担任は、校長の宮城景秋先生、先生は沖繩師範学校卒で学殖の深い評判の方であられた。先生は地歴国語の教授が得意であられるようでした。特に歴史の時間には巧みな話術が興味ある物語を交えつゝなされる授業にすつかり生徒は魅せられ、歴史の時間の来るのが待遠しかつた。

當時の学用品で、現今と變つた事と言へば、書取練習や計算練習に石盤（石製と紙製とがあつた）を使用して、ノートは使つた覚えがない。習字の練習用として「書方草紙」を用いた。これは、一旦習字を習つた紙を何枚か綴ちたもので、習字練習には常に之を使用した。それ度重なる練習で、紙面がまつ黒になり、書いた字が見えなくともかまわず練習に使用するという風で、今考えると全くナンセンスな話に聞こえるが、あの時代は、それがちよつともおかしくもなく行われたのである。

又現今のように字引や参考書等もなかつた。その頃誰かが国語の字引を一冊持つて来たときは、こんな便利至極な本もあるも

のだと、みな感心して、ひつぱり風で見せて貰ったことがあった。雑誌もついぞ読んだことがなかった。

その頃、われわれの間に、はやつた遊戯が今も思い出されるのは山より、角力、水泳、縄跳び、貝殻チャンクルー、イツパ打等である。山よりは、裏の森の中腹、約七、八米の所まで机の蓋を持つて登り、その蓋を乗台にし、両手で、それをおさえつつ一気にサツと麓まで下り下りるのである。

あの頃は、雑木がこんもり茂つて、こるわれわれの頭上は、見事な緑のアーチを形造つていた。時には独りで、時には相手と同時にこりくらをする時の気持ちは、実にスリル満点であった。角力は、正門前の川の土手下の自然生の葦の茂みを土俵にして行はれた。大抵は、グループ対グループ、字対字に分れて技と力を競い合つたものだ。

水泳は、有銘橋のあたりから下流へかけて水もそう汚れず適度の深さがあつたので良いプールになつた。其の他道路で行うイツパー打ちや浜から拾つた美しい模様の貝殻でやる、チャンクルー等、何れも野性味たつぷりな遊戯は過ぎて返らぬ楽しかつたあの頃の思い出を秘めないものはない。

かようにして毎日楽しく過した天銘校での学校生活も意外に早く終止符を打たねばならなくなつた。と言うのは、五年修了と同時に私は父の任地（久志村長をしていた）瀬嵩に在る久志尋常高等小学校へ転校したからである。

在学当時の想い出と

母校の発展を期待して

現東村助役 比 嘉 蒲 春

創立七〇周年、まことにおめでとうございます。この輝かしい記念に際しまして、皆様と共に慶びをわかちあいながら私の在学当時を回想し、思いつくがままに当時の想い出を記して見たいと思います。

私が本校に入學したのは、大正七年で、当時は生徒の服装も今のようにな統一されたものではなく、各人各様の着物を着て通學していました。先生方の服装も着物に羽織はかまの方も洋服を着た先生もありました。校舎は、かわらぶきの校舎で、カギ型に造られ、カギ型になつた部分で校庭がふたつに分けられ、東側を東の運動場、西側を西の運動場と名付けておりました。今でこそ、男女共学で、何のへだたりもありませんが、当時の風習は、学校においても男女の席が区別されているだけでなく、運動場の縄張も東は男生徒、西は女生徒の運動場と区別され、縄張を侵すようなことはありませんでした。

当時は久志村に属しており、学区も久志村の天仁屋も含まれており、学校名も天銘尋常高等小学校と云はれておりましたが、今でも天銘校と云う当時の学校名がなつかしく思われます。運動場には東西共に大きな「デイゴ」の木があり、季節になると、真紅な花が運動場をおおい、その花の下で色々のあそびをしたことが、今でも一番なつかしい想い出となつて心の中心に残っております。

その美しい環境の中で学んだ当時を思出すと、在学当時の先生方や学友の面影が次々に頭に浮んでまいります。

今学校の一角に立つて、その全景を眺めると立派に整備された学園と在学当時の学園の姿が頭の中で交錯し、生徒であるような錯覚にとらわれ、まことに感無量でございます。

創立から七〇年、生々発展を遂げた母校の姿を眺めるとき、長い期間に幾多の人材を世に送った母校が頼もしく、まことに力強い感がいたします。同時に第二次世界大戦の戦禍にあい、灰燼の中から、戦後二〇余年の才月を経てその間、幾多の困難を克服して、立派な学園に発展させた先ばい各位の努力に対する感謝の念が湧いてまいります。

而しながら、物凄い勢で変り行く社会情勢の中で、教育施設の面でも、時代の要求として、尚幾多の不自由な面があることを思うと、早く本土並の内容共に充実した学園にしていきたいと云うあせりを感じます。子供は良い環境の中に育つて、教育の力と相まつて立派な人間が形成されると云われております。

この輝しい七〇周年を記念するにあたり、社会環境の学校教育に及ぼす影響を深く認識し、正しい社会環境の確立に努力し、学校と一体となり、限らない母校の発展を皆様と共に期待したいと思ひます。

旅で想う

在大阪 平 田 庚

ふるさとは、美しい風物と、こまやかな人情と、貧しさの住む、素朴でわびしい寒校である。

平和が続いて二十年、南の国に文化の春が訪れて、自由と繁栄の輝かしい時代が往年の秘境、有銘にも開花しようとしている。教育の普及度が、民族の発展を測るモノサシだと云はれている今日、有銘校の創立七十周年記念の諸行事に示された内外の関心や、之を主催して、有終の美を飾つた人々に、心から感謝と同慶の意を表明したい。

七十年の校歴をくわしく知るわけではないが、浮草の様な、都会生活の中で、遠い母校の記憶を辿りながら、今昔の感をかみしめて、旅情を慰める事がしばしばである。

樹齢数百年の数本のデイゴの木や、其の葉陰に幾十年か風雨にたえてかたむいた木造の校舎など、他国で想う遠い昔の故郷は格別になつかしいものである。其の原始的昔を今にくらべると、隔世の感とまでは行かなくても、文明に開花しようとする現在の過渡的發展は、誠に喜ばしい限りである。

教育も、庶民の暮らしも、沖繩は貧しい国であつた。確かに天与の資源は乏しい、又此れを嘆く人々の過去の労苦の昔語りには、限らない哀愁がある。こまやかな人情も、あたたかい同胞愛も、こうした清貧の中で培かわれたものではなからうか。次の様な物語がある。

昭和三年頃の屋我地に、小学校五年生を頭に数名の子を持つ

貧しい一家があつた。父は毎日、野に山に体力の限界すれ／＼の重労働で一家の生計を支えている。

或る日、山で働いている父の作業場へ弁当を届ける役目を母からいつつけられた小学校五年生の長男は、元氣よく山道を急ぐのだが、空腹と好奇心にかられて、途中で弁当をつい開いて見たくなつた。開いて見ると、白いめしとイワシの焼いたのが三匹である。前後の事情から食慾は十分であるし、少し位ならと弁当の片隅からめしを一口、イワシのしつぽを少しばかり喰べて見た。実にうまい、が、しかし、父の空腹を考えて再び道を急ぐのだが、弁当の味覚は彼をとらえてはなさなかつた。

途中再び弁当は開かれた。そして彼は次の様な理クツをまとめて見た。即ち、「弁当の片隅だけがくぼんでいたのでは父にさとられる、又一匹のイワシのしつぽだけが、無いのも変である。証拠はよろしく湮滅すべし」と決意した。

弁当のイワシは二匹になり、めしは平面にならされたが、重さは半分程にへつてしまつた。それでも弁当は、つ、がなく父に届けられたのだが、しかし食事中の父の表情には別段の変化もなく、喰べかけの弁当の半分を彼に残し与えたのもいつもの通りであつたという。

其の日の夕暮れ、其の一家に貧しい夕餉の支度はとゞのえられた。竹ザルに一杯つまれた冷えたサツマイモ、それを囲んで子等は坐る。父と長男には一膳のめしが用意されている。

先づ始めは芋を喰べる。芋で満腹か近くなつた頃、父は自分の為の一膳のめしを一箸づゝ子等に分け与える。子等は手のヒラで之を受取る。そしていよいよ最後に一箸のめしを名残り惜しく味わいながら、夕食を終へるのである。

心中期するところあつて、父はしみじみと

「お前たち米のめしが腹一杯喰べたいか」とたづねた。

突然の父の問いに、とまどいながらも、遠慮深げに

「ウン」とうなづくのだが、子等のまなざしには、遠く溼しない夢を追う、空ろな光が切実であつたという。

其の夜父は南米への勇飛を決意した。故郷を遠くはなれた其の父は、ソテツを削つた昔や、一汁、一菜の家郷の貧しい晚餐を想いながら、否それこそが、遠い他国での彼の勤勉の源泉であつたに違いない。

其の後父の送金によつて、子等は、すく／＼と成長した。

一番上の子は、旧制の中等教育を終えて、或る専門学校に進み、知識人として成長した。即ちこの物語を私に聞かせて呉れた私の先輩である。そして最後に次の様に結んだのである。

「平田君、芋はね、君、正に人類の敵だよ」

と、此の言葉、幼年期の成長に欠く事の出来なかつた、忘れ難い芋というなつかしい伴侶に封する懐旧の念であるが、或いは又、戦前の政治権力に無氣力に順応した、みじめな世代に対する痛烈な批判なのだろうか。

先哲は、いみじくも「衣食足つて礼節を知る」と遺し訓えて

いる。沖繩の同胞よ、有銘の郷友よ、銘せよと叫びたい。

こうした背景は、沖繩北部の人々に共通な家郷のイメージであり、私が踏み越えて来た哀歎の中に切なく、よみがえる故郷の歴史もある。唯物的な福祉が一面では空しくはかないものだと不惑の年代の利那的な悟りを折々に繰りかえすのだが、しかしそれでも、尚私は以上の様な思索の中でしか生きていない。願はくば、氣力ある頼もしい民族として、発展、成長する若い

人々を故郷に期待したいし、果し得なかつた志をこれらの人々に託したいものである。

世は移る。大国の武装権力の為の戦略基地化は、沖縄の滅亡を招来するとか、力の均衝こそ世界平和を維持するとか、種々の論議があるけれども、私共は、教育の普及による世界諸民族の将来の良識を信じたいし、同時に又家郷の人々が、高度の文化を速やかに吸収して教育に、経済に、豊かな楽土としての有銘を一日も早くと、常に念ずる次第である。



編集後記



- 一、創立七〇周年を迎えるに当り、本校の歩みを記念誌として編集できましたことを、御協力下さいました皆様と共によろこび申し上げます。
- 二、七〇周年記念誌として、ふさわしいものにするため、創立より、今日までの母校の成長を思い出の形でより多くとり入れることに努力したつもりであります。原稿の集りが悪く、残念に思いました。
- 三、出来る限り、完全を期したいと思いましたが、不備な点多々あることと思えますので、今後の研究課題として、御指導を仰ぎたいと存じます。
- 四、最後に本誌出版に当たり、祝辞、思い出等の貴重な資料をお寄せ下さいました皆様と、製本に格別の御協力と便宜を与えていただきました「うらわ印刷所」に深く謝意を表しまして、巻を閉じます。

玉城 武上

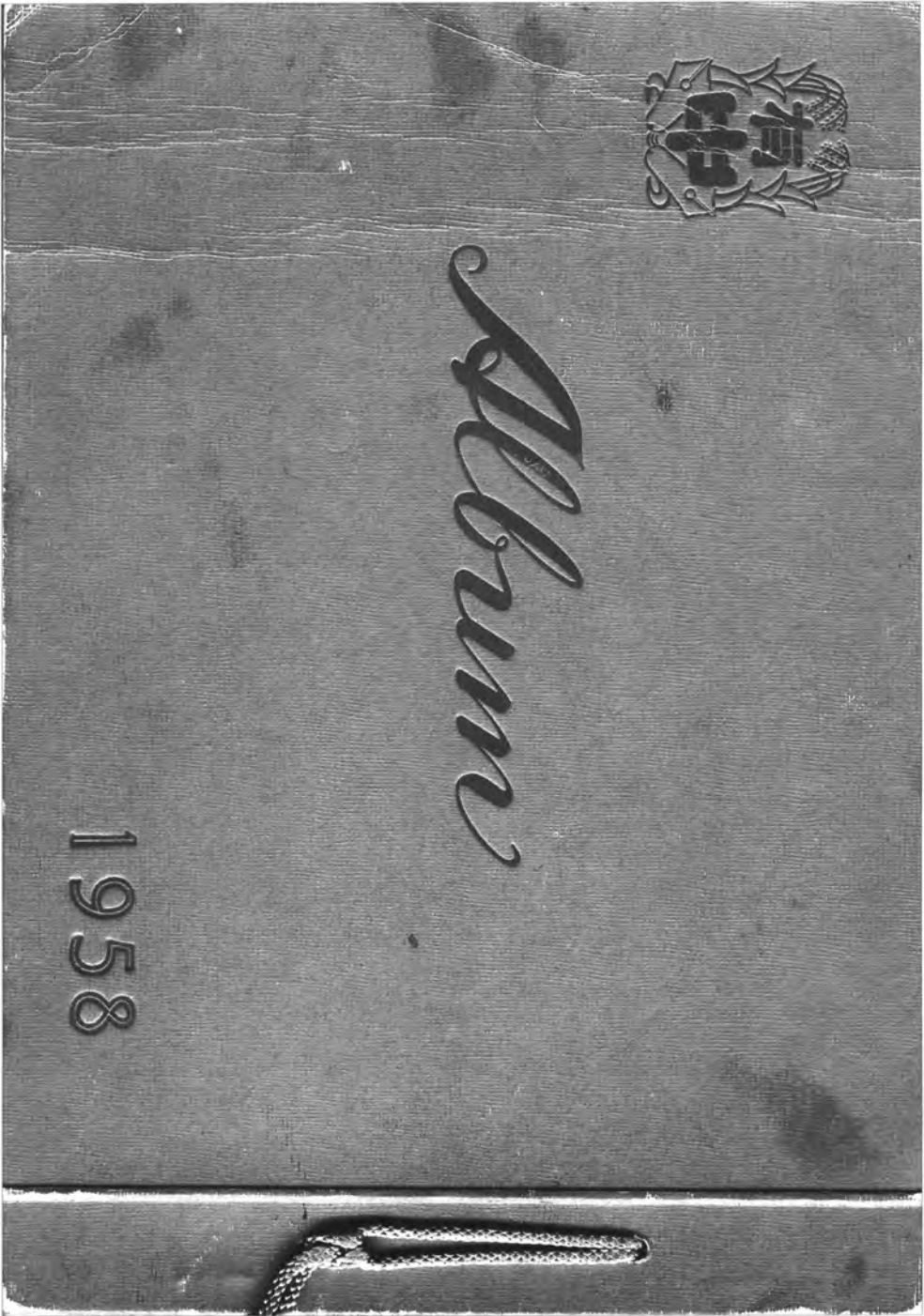


昭和四十二年一月印刷
昭和四十二年二月發行

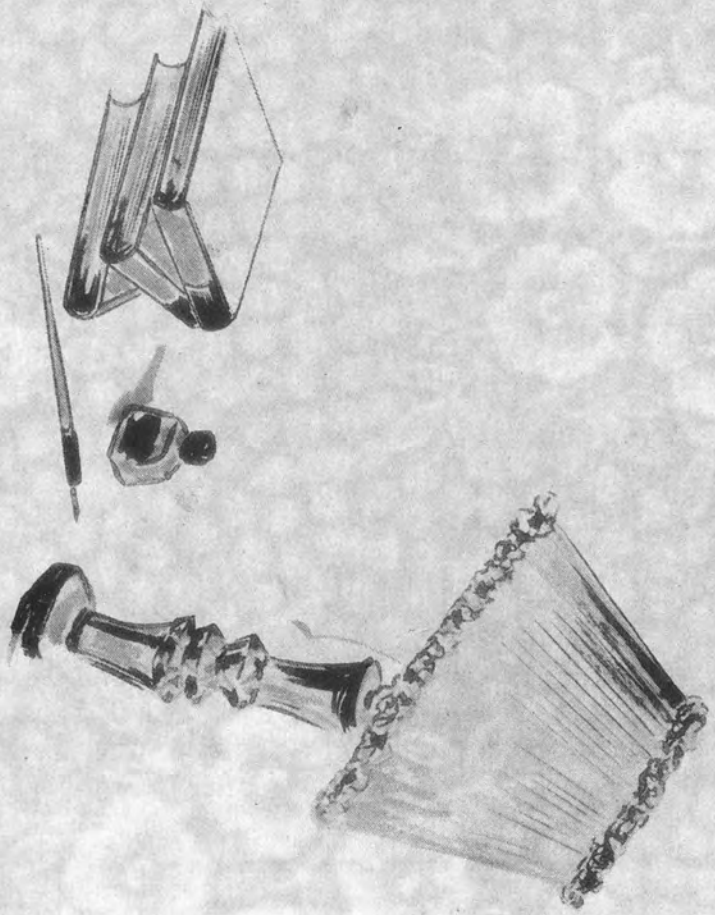
創立七十周年記念誌

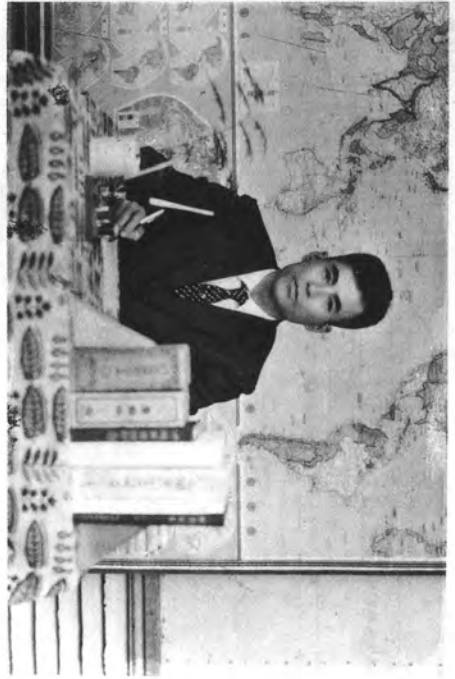
編集兼發行 有銘小中学校
印刷 かわらわ印刷所
(照屋哲郎)

二、一九五八年度学校アルバム

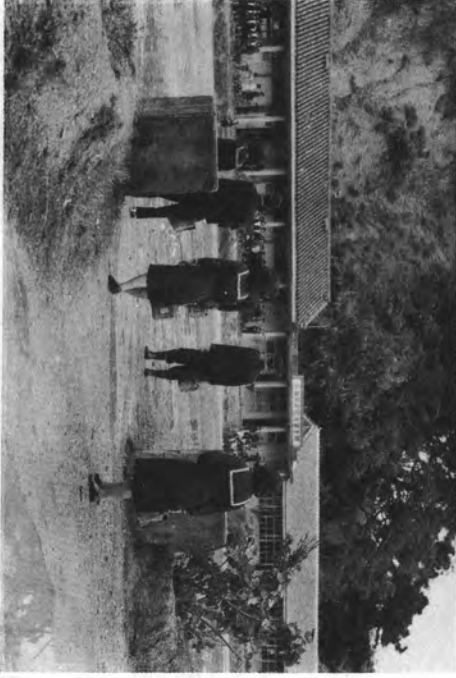


有銘中學校





校長室之古堅宗徳校長



校舍之校門

校 副
進 強 正
ん し
で く く

恩師の面影



平良隆勇先生



玉城健男先生



伊佐仙子先生



玉城勝先生



寄川物先生



筒長十へ先生



大城博先生



港川茂子先生



石川智枝子(世話人)



石川元清先生



平良幸子先生



石川元平先生



校庭と校舎



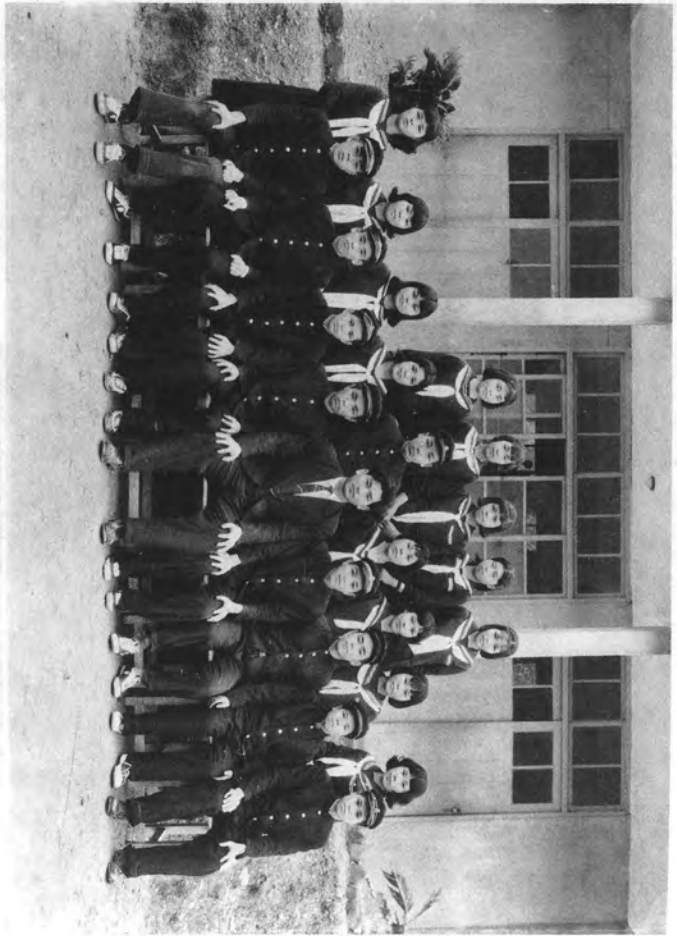
朝の集ひ

健康第一で あすもりに秘める
高き知性と深き感受を
究めよ



校長先生のお話

常に大志を抱き
いばらの社会に根強く生きよ
祝 卒業



3 年 生

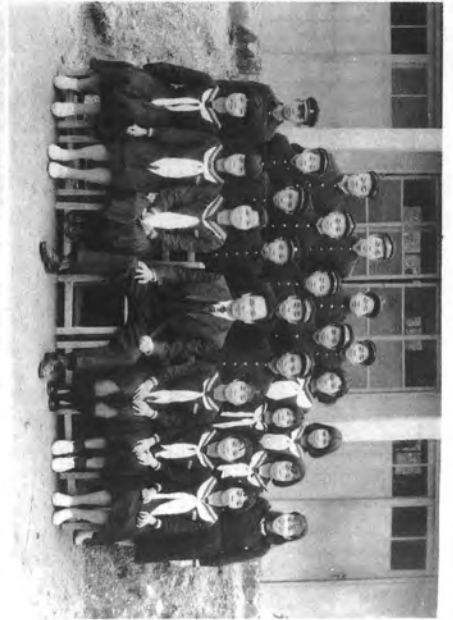


中
三

三、げに東海は果しなき
 学びの道のしるしなり
 正しく強くきたえつつ
 理想の岸に達まなん

四、進みて止まぬ文明の
 時のうしよに乗りて立ち
 ほまれあげん我が母校
 きづかんかなや エイトピア

五、おそかに照る朝日子の
 光にもゆる山の色
 これを母校の姿なり
 栄え榮えよ有銘校



よき風吹かせ我が学び舎に (2年生)

有銘校校歌
 松根雪州 作詞
 渡口政一 作曲

一、山紫ききに海香く

万古に清き有銘川

足下によするさざ波の

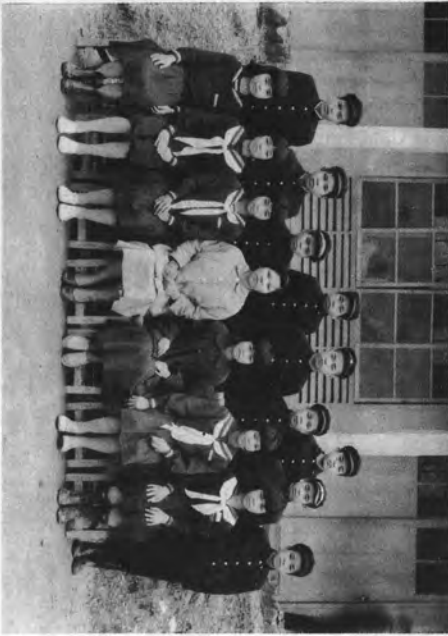
音もゆかしくひびくなり

二、恵みゆたけき天然の

葉國に立つ有銘校

若き健児の血はたぎり

希望は踊る胸の中



別れてもなお忘るゝな (1年生)



司法ビル



元気で働いた福地原



旅行先の朝食



向いが議長席



行政ビル棟に

楽しい



波止場

社会見学



堀大を横に



あ、すばらしい白山丸



タケノコ



ワンス体操



中校のダンス



マリク



月見草



遠足の出発

体育祭



全校遊ス



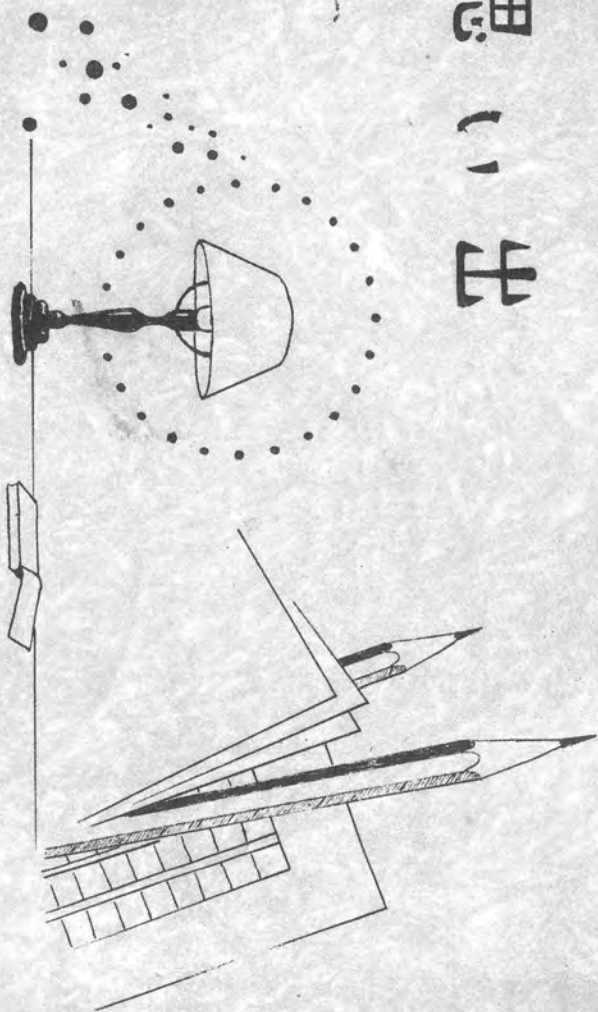
中校ダンス



中校ダンス

三、一九五九年度学校アルバム

思い出



1959

有銘中学校



會院の校門



校舎全景



校長室の校長

校訓
 一 正しく
 一 強く
 一 進んで

恩師の顔



香川ハツ先生



伊佐仙子先生



平良展勇先生



大城親喜教頭



古堅宗徳校長



平良幸子先生



玉城健男先生



大城笑子先生



大城博先生



御長十へ先生



一

第一中。



二

第二中。



下等女子部員中。



高等男子部員中。



家政科



英語科

有銘校々歌
松根星舟作詞
渡口政一作曲

- 一、山峯に海音く 万古に清き有銘川
- 足下によするさゝ疲の 音も味しくひこくなり
- 二、恵之豊けき天然の 楽園に立つ有銘校
- 若き健児の血はたどり 希望は踊る胸の中



- 三、げに東海は果てしなき 学びの道のしるしなり
- 正しく強くきたえつ、 理想の岸に運まなん

- 四、進みて止まぬ文明の 時の潮にのりて立ち
- ほまれおげなん我が母校

きずかにかなやエトトビヤ

- 五、おごそかに照る朝日の子の 光に前ゆる山の色
- これぞ母校の姿なり

栄え栄えよ有銘校



久高 君



平田 君



平田 君



天久 君



仲松 君



掛真 君



寄川 君



港川 君



宮城 君



久高 君



金城 君



崎山 君



久高 君



新垣 君



城塚 さん



花塚 さん



石塚 さん



中西 さん



植塚 さん



新崎 君



城間 君



榎野 さん



栗川 さん



又吉 さん



吉元 さん



筒長 さん



比嘉 さん



田嶋 さん

生

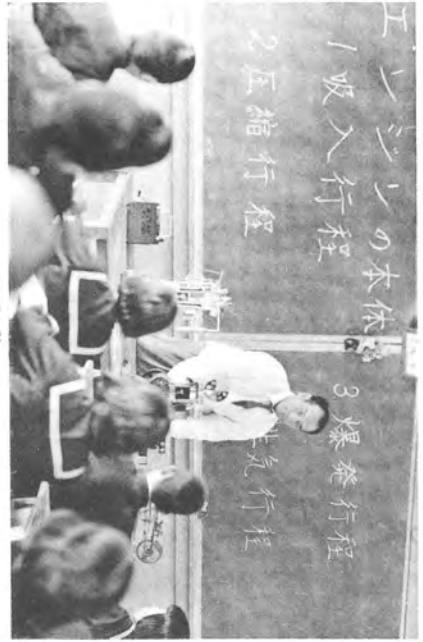
業

卒

期

十一

第



理科



社会科



音楽科



数学科



第10章

優勝を祝う

優勝を祝う

優勝を祝う

優勝を祝う

優勝を祝う

優勝を祝う

優勝を祝う

優勝を祝う

優勝を祝う



首里博物館をバックに



気象観測の説明



旅行の想い出

建築高次 第一者



波の上



バス1号線を走る



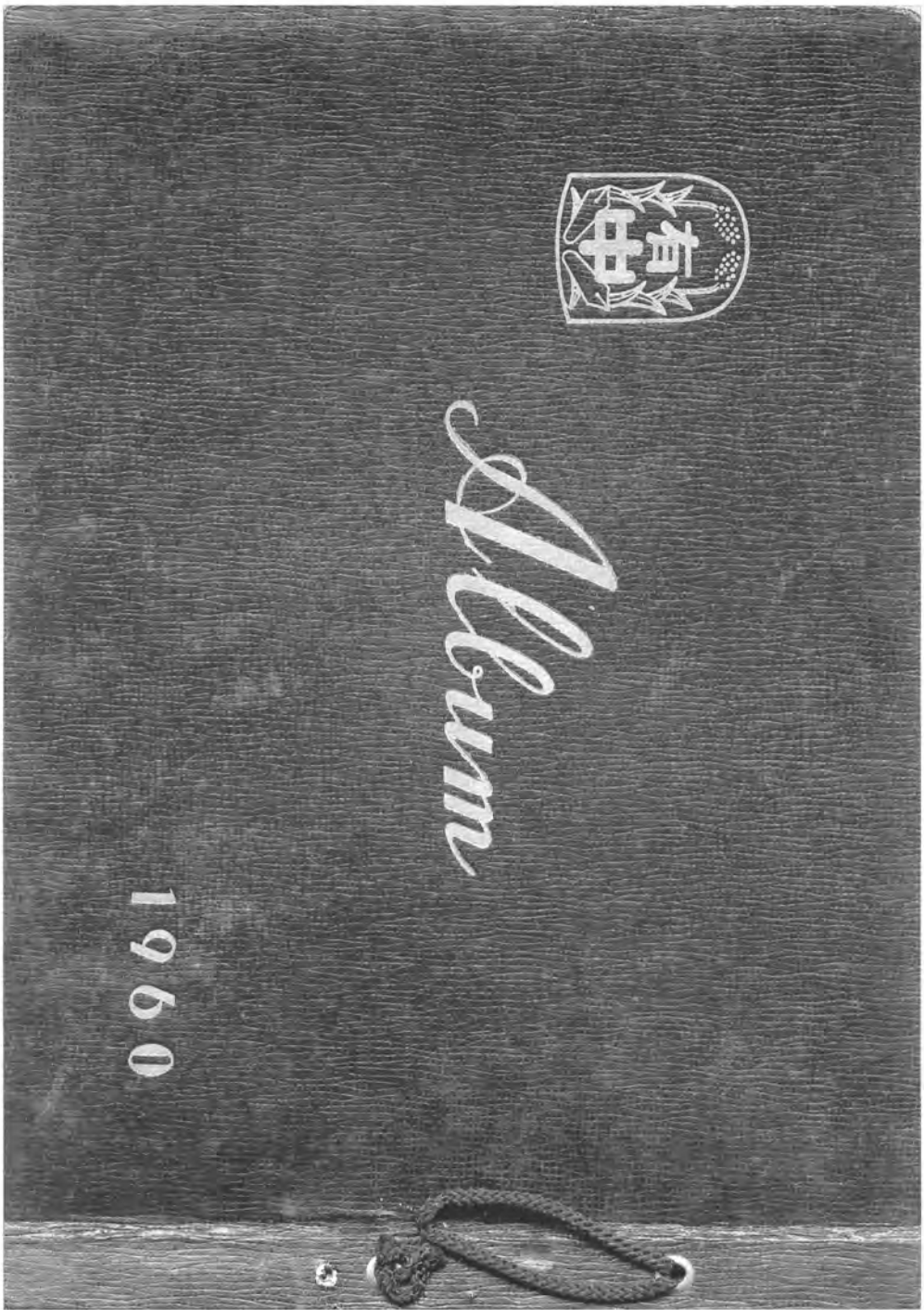
中城城の門



柏港・郵船丸の上より



四、一九六〇年度学校アルバム



校舎



校舎全景



校長室と古蹟校長



校訓
一、進んで
一、強く
一、正しく



伊佐仙子先生



平良達勇先生



大城親壽教頭



吉野宗徳校長



大城博先生



翁長ナへ先生



翁川ハツ先生



石川祐清先生



石川智恵子さん



新里忠一さん



平良幸子先生



大城実子先生



鶴波 正男君



船長 良治君



香田 孝英君



徳田チヅ子さん



山口 栄和君



山口 栄宗君



比嘉 文子さん



比嘉 良津子さん



玉那覇 美智子さん



田嶋 兼行君



神谷 厚造君



大城 晋弘君



津波 まき子さん



吉堅 盛和君



船場 慶明君



船富 里正仁君



比嘉 静子さん



岡部 マミ子さん

昭和三十五年 三月

(第十二期) 卒業生



仲科 勝志君



腕白クラスの1年生



腕白家の2年生

有銘校々歌 松根夏寿作詩
渡口取一作曲

一、山麓に海響く 乃古に清き有銘川
足下によするとよ波の 音も疾しくひびくとなり

二、遊ぶ喜びき天然の 楽園に立つ有銘校
若き健児の血はたせり 希望は語る胸の中



我が学び舎

三、げに東海は果てしなき 学びの道しるしなり
正しく強く生きてきたつ、理想の岸に達まん

四、進みて止まぬ文明の 時の潮にのりて立ち
はまれおげなん我が母校

きずかんかなやユニットピヤ

五、おごそかに照る朝日の子の 光に輝ゆる山の色
これぞ母校の姿なり
安永茶屋上有銘校



授業スナツク

家政科



英語科



記念品の数棒をバツクに



体育科



音楽科



数学科



楽しい遊足



水泳



作業



政府へ



金武のお寺にて

修学旅行の思い出



あ、すばらしい白山丸



宮里到着

体育祭



男女仲良く、中校ダンス



優勝旗を先頭にイッパチニ

恩師の郷関録

氏名	本籍	担任	主任	氏名	住所
古堅 宗徳	国頭郡国頭村安田102	校長	社理・社数・図	山口 栄宗	東村字有銘806
大城 鶴壽	〃 〃 与那86	中 3	〃	山口 栄邦	〃
平良 農勇	〃 〃 東村字有銘24	中 2	〃	稲福 すみ子	〃
伊佐 柚子	〃 〃 〃 845	中 1	〃	寄川 孝実	〃
寄川 ハツ	〃 〃 〃 654	小 3	〃	翁長 良治	〃
翁長 ナヘ	〃 〃 〃 468	小 1	〃	港川 ナツ子	〃
大城 博	〃 〃 〃 903	小 6	〃	徳波 正男	〃
大城 笑子	〃 〃 〃	小 5	〃	大城 善弘	〃
平良 幸子	〃 〃 〃 24	小 2	〃	神谷 厚造	〃
新里 忠一	〃 〃 〃 字慶佐次120	小 4	英 体・職	田場 兼行	〃
石川 元清	〃 〃 〃 字有銘742	書記	〃	王那覇美智子	〃
石川 千恵子	〃 〃 〃	〃	〃	比嘉美津子	〃
				比嘉 文子	〃
				仲村 勝志	〃 字慶佐次
				屋富祖正仁	〃
				島島 肇明	〃
				古堅 盛和	〃
				津波 まき子	〃
				比嘉 勝子	〃



編集後記

記念誌の発刊は、我が有銘小学校百年の歩みを検証し、明日への発展につなげるために、創立百周年記念事業の一環として企画されました。

平成四年六月二十七日に期成会発足と同時に記念誌編集部も設置されましたが、記念式典や祝賀会の準備に追われ、本格的に作業がスタートしたのは平成七年七月二日の記念式典等の行事が終わってからでした。

本校は天銘尋常小学校として創設され、有銘尋常小学校、有銘国民学校と幾多の変遷を経て今日に至っております。この百年の歴史を掘り起こして検証していくためには多くの資料が必要であり、記念誌の編集方針として、写真を多用した「ビジュアルな誌面」づくりをめざして作業がスタートしました。しかし、資料集めは予想以上の困難を極めました。

このような中で、那覇市在の金城棟永氏をはじめ翁長ナへ先生、平良晨勇先生等から多くの貴重な写真の提供を賜り、記念誌の内容を豊かにしてくれました。

一方、母校を語る座談会には諸先輩方が快く出席いただき往時を語ってくださいしたこと、回想録として玉稿を寄せられた先生方、同窓生の皆さん。聞き取り調査にご協力いただいた新里義雄先生をはじめ、貴重な資料を提供して下さった皆さんに紙面をかりて厚くお礼を申し上げます。記念誌編集の大きな原動

力となりました。

また、写真の複製等で全面的に協力を頂いた名護市在三光写真館の古波藏真一郎さん、編集作業を一緒に手伝っていたいた副部長の比嘉幸男さん、側面からご指導、ご協力を下さいました平良晨男・幸子先生をはじめ、関係各位に感謝申し上げます。

厳しいスケジュールの中で持てる情熱の全てを傾けてきたつもりではありますが、必ずしも満足いく記念誌とはいえません。しかし、多くの同窓生や関係者の皆さんがこの「百周年記念誌」をとおして有銘校に思いを馳せ、本校の教育発展に寄与することができれば幸いに存じます。

最後に、当記念誌づくりに印刷の面からご協力をいただいた(協)丸正印刷企画部の佐伯万喜夫次長をはじめ社員の皆様に心からお礼申し上げます。

平成九年二月二八日

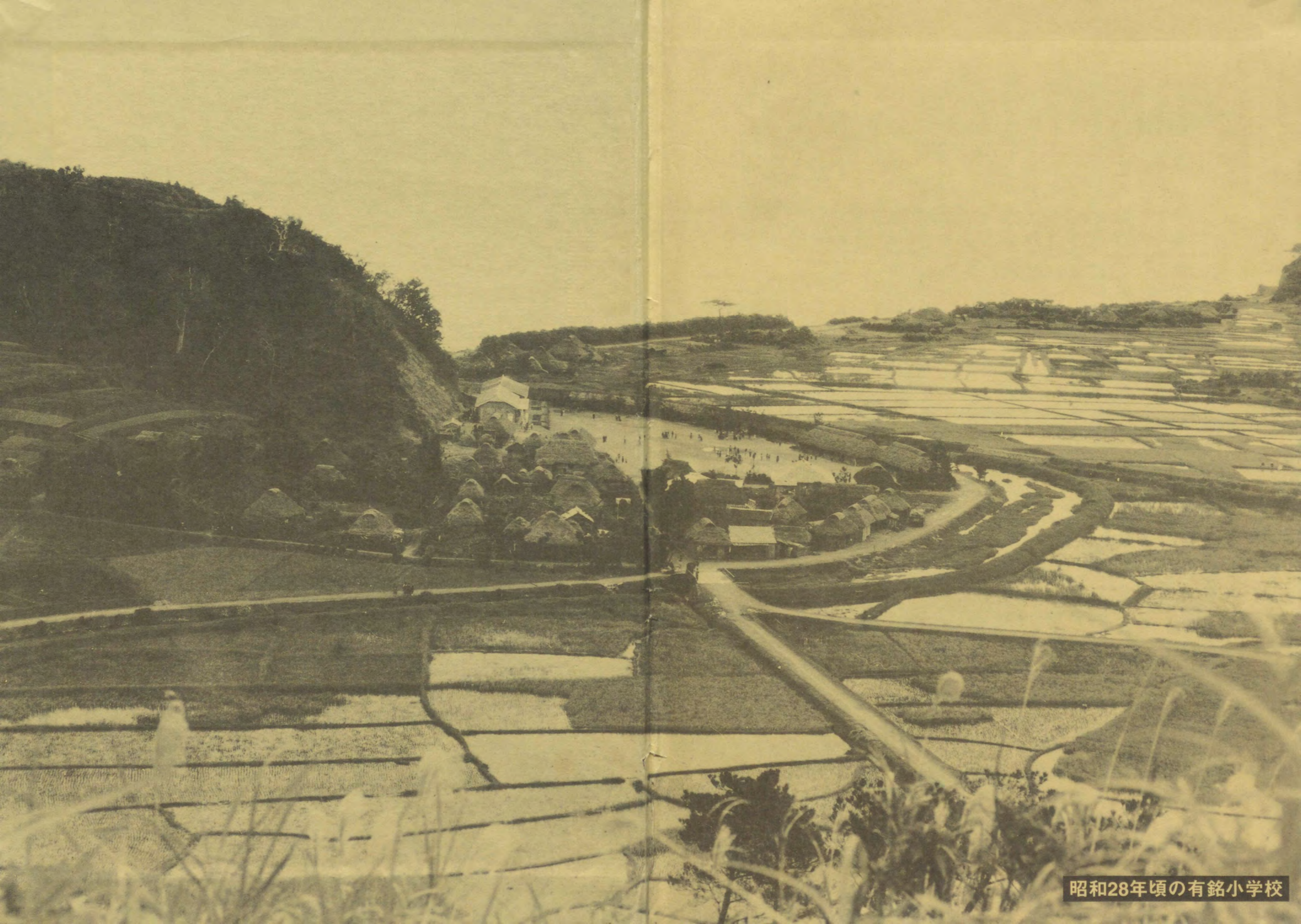
記念誌編集部長 山城定雄

写真提供者

- ・金城 棟 永
- ・ウィリアム E ジェスキンス ・ラブ オーシュリ
- ・平 良 晨 勇
- ・平 良 幸 子
- ・翁 長 ナ ヘ
- ・島 袋 徳 盛
- ・知名 定 善
- ・新 崎 康 守
- ・具志堅 興 徳
- ・佐久本 盛 明
- ・新 垣 善 勇
- ・当 山 全 伸
- ・平 田 嗣 雄
- ・山 城 定 雄
- ・平 田 尚 樹
- ・寺 下 昌 信

有銘小学校創立百周年記念誌

- 1997年（平成9）2月28日発行
- 編 集 東村立有銘小学校
創立百周年記念事業期成会記念誌編集部
- 発 行 東村立有銘小学校
創立百周年記念事業期成会
- 沖縄県国頭村郡東村字有銘1番地
電 話（0980）43-2061
- 印 刷 （協）丸 正 印 刷
沖縄県西原町小那覇1215番地
電話（098）835-8181
-



昭和28年頃の有銘小学校

